

赤迫遺跡G区 元宮遺跡1・2・6次

2014年

日田市教育委員会

序 文

本報告書は、当委員会が過去に発掘調査を実施しました赤迫遺跡G区と元宮遺跡1・2・6次調査の調査内容をまとめたものです。

元宮遺跡は、「元宮原」と呼ばれる台地を見渡すことが出来る丘陵の一段高い平坦部に位置し、赤迫遺跡はその北側の中尾原台地南端付近より派生する尾根上とその眼下に細長く形成された谷状沖積地一帯に位置しています。この2つの遺跡からは、ともに古墳時代の墳墓が見つかっています。

周辺には国指定史跡である法恩寺山古墳群なども所在しており、日田市における古墳時代の社会を知るうえで、ともに重要な遺跡であるといえます。

本報告書が、文化財の保護はもちろんのこと、日田市の歴史を解明していく資料として地域の方々や児童生徒の社会化教材として寄与していければ幸いです。

最後になりましたが、調査、整理から報告書作成にいたるまでご指導、ご協力を賜りました多くの関係者の方々に対し、厚くお礼を申し上げます。

平成26年3月

日田市教育委員会

教育長 合原 多賀雄

例 言

1. 本書は、日田市教育委員会が国庫・県費補助を得て実施した下記の遺跡の発掘調査報告書である。
赤迫遺跡 G 区（平成 8 年度）
元宮遺跡 1 次調査（平成 10 年度）
元宮遺跡 2 次調査（平成 11 年度）
元宮遺跡 6 次調査（平成 12 年度）
2. これらの調査は、当時は日田地区遺跡群発掘調査事業として実施したもので、現在の市内遺跡発掘調査事業にあたる。
3. 発掘調査にあたっては、各遺跡の土地所有者のご協力を得た。
4. 各遺跡の調査現場での実測・写真撮影は調査担当が行った。
5. 本書に使用している遺構図の方位は、全て磁北である。
6. 本書に掲載した遺構実測・遺物実測に関して、元宮遺跡は有限会社九州文化財リサーチに委託した成果品を使用し、赤迫遺跡は雅企画有限公司に委託した成果品を使用した。
7. 写真図版中の番号は、全て挿図番号と一致する。
8. 赤迫遺跡の遺物写真は若杉が撮影を行い、元宮遺跡の遺物写真は有限会社九州文化財リサーチに委託した成果品を使用した。
9. 出土遺物および図面、写真類は、日田市埋蔵文化財センターにて保管している。また、人骨については九州大学大学院比較社会文化基層構造講座の古人骨・考古資料収蔵庫に保管されている。
10. 人骨の調査、取上げは、九州大学大学院の田中良之教授・金宰賢助手・平美典氏・石井博司氏・辻田淳一郎氏が行い、本書への調査報告の原稿提供をいただいた。
11. 本書は、第 3 章、第 9 章（1）については若杉が、第 1 章（2）、第 4 章については上原が、第 1 章（3）（4）第 5・6 章については行時志郎が執筆を担当した。第 9 章（2）については、渡邊と上原で協議して執筆した。本書の編集は上原が担当した。



日田市の位置

本文目次

第1章 調査に至る経緯と組織	1
(1) 赤迫遺跡G区調査の経緯	1
(2) 元宮遺跡1次調査の経緯	2
(3) 元宮遺跡2次調査の経緯	3
(4) 元宮遺跡6次調査の経緯	3
(5) 調査の組織	4
第2章 遺跡の立地と環境	6
第3章 赤迫遺跡G区の調査	8
(1) 調査の概要	8
(2) 遺構・遺物について	8
第4章 元宮遺跡1次の調査	20
(1) 調査の概要	20
(2) 遺構・遺物について	20
第5章 元宮遺跡2次の調査	22
(1) 調査の概要	22
(2) 遺構・遺物について	22
第6章 元宮遺跡6次の調査	27
(1) 調査の概要	27
(2) 遺構・遺物について	27
第7章 赤迫遺跡G区出土人骨について	29
第8章 元宮遺跡出土人骨について	45
第9章 総括	51
(1) 赤迫遺跡G区について	51
(2) 元宮遺跡1・2・6次について	51

挿図目次

第1図	赤迫遺跡のこれまでの調査位置図 (1/5,000)	1
第2図	元宮遺跡1~6次調査位置図 (1/5,000)	3
第3図	元宮遺跡1・2・6次調査位置図 (1/1,250)	3
第4図	赤迫・元宮遺跡周辺遺跡図 (1/20,000)	7
第5図	周辺地形測量図及び遺構配置図 (1/500)	8
第6図	1号墓実測図 (1/30)	9
第7図	1号墓遺物・人骨出土状況実測図 (1/20)	10
第8図	1号墓出土遺物実測図 (1/2)	11
第9図	2号墓実測図 (1/30、1/60)	12
第10図	2号墓遺物・人骨出土状況実測図 (1/20)	13
第11図	2号墓出土遺物実測図 (1/1)	13
第12図	3号墓実測図 (1/30) 及び出土遺物実測図 (1・3:1/2、2:1/3)	14
第13図	4号墓実測図 (1/30)	15
第14図	4号墓遺物・人骨出土状況実測図 (1/20)	15
第15図	4号墓出土遺物実測図 (1~10:1/2、11~12:1/3)	16
第16図	5号墓実測図 (1/30)	17
第17図	5号墓出土実測図 (1・2:1/2、3:1/5)	17
第18図	6号墓実測図 (1/30) 及び出土遺物実測図 (1/5)	18
第19図	元宮遺跡1次調査遺構配置図 (1/200)	20
第20図	1号石蓋土坑墓実測図 (1/30)	21
第21図	元宮遺跡2次調査遺構配置図 (1/200)	22
第22図	1号槨棺墓実測図 (1/30)	23
第23図	1号槨棺墓実測図 (1/8)	23
第24図	1号木棺墓実測図 (1/30)	24
第25図	1号土坑墓実測図 (1/30)	24
第26図	2号土坑墓実測図 (1/30)	25
第27図	1号土溝実測図 (1/30)	25
第28図	出土土器実測図 (1/4)	26
第29図	元宮遺跡6次調査遺構配置図 (1/200)	27
第30図	1号石棺墓実測図 (1/30)	27
第31図	1号石蓋土坑墓実測図 (1/30)	28
第32図	1号墓人骨出土状況	30
第33図	2号墓人骨出土状況	31
第34図	4号墓人骨出土状況	33

写真図版

写真1

写真図版1 2 (元宮遺跡2次)

写真2

写真図版1 3 (元宮遺跡2次)

写真図版1

写真図版1 4 (元宮遺跡2・6次)

写真図版2

写真図版1 5 (赤迫遺跡G区)

写真図版3

写真図版1 6 (赤迫遺跡G区)

写真図版4

表目次

写真図版5

第1表 赤迫遺跡G区出土鉄器観察表

写真図版6

19

写真図版7 (赤迫遺跡G区)

第2表 元宮遺跡出土器観察表

28

写真図版8 (赤迫遺跡G区)

第3表 主要頸蓋計測項目の平均値比較 (男性)

48

写真図版9 (元宮遺跡1次)

第4表 上肢骨の計測値と他集団との比較 (男性)

48

写真図版10 (元宮遺跡1次)

第5表 下肢骨の計測値と他集団との比較 (男性)

48

写真図版11 (元宮遺跡1次)

第1章 調査に至る経緯と組織

本書で報告する赤迫遺跡G区、元宮遺跡1次、2次、6次の調査に至る経緯は以下の通りである。

(1) 赤迫遺跡 G区調査の経緯

平成7年度に台風災害(平成2年度)による風倒木処理の作業中に石棺材が露出し、土地所有者より市文化課(当時)に連絡があったことから、土地所有者と協議を行い、平成8年1月30日には国庫補助事業で発掘調査を行うこととなった。その後、日程調整等の協議を経て、3月25日より調査を開始し、3月27日で一旦終了したが、その後、年度を跨いだ翌平成8年4月10日より調査を再開し、6月28日まで発掘調査を行った。

調査経過の概略は以下の通りである。

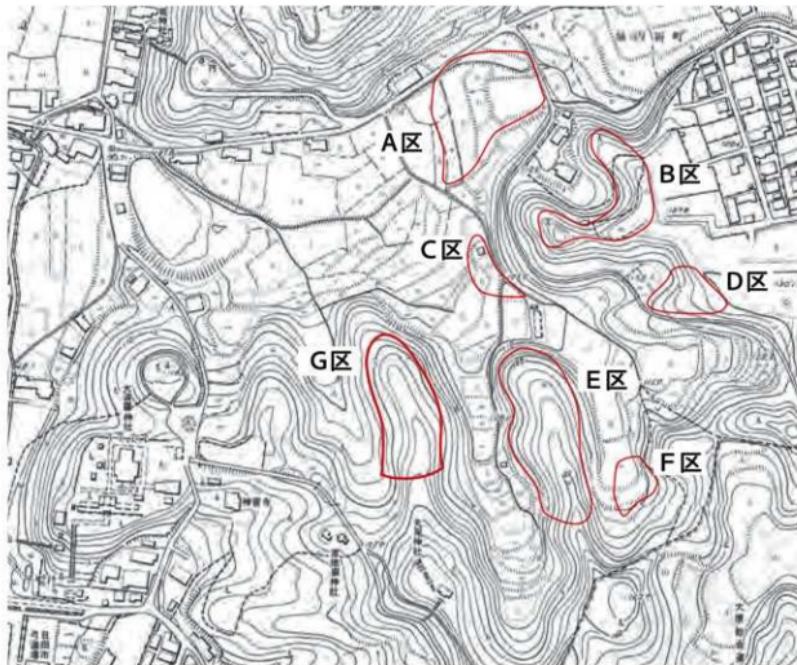
4月10日 作業員による遺構検出を開始。(30日まで)

5月18日 九州大学教授(当時)の田中良之氏を招聘し現地で指導を受け、人骨の調査と取り上げを依頼。

5月22日 九州大学大学院の石井氏と辻田氏によって人骨の実測・取り上げを開始。

6月11日 遺構の埋め戻しを開始。

6月28日 全ての作業を終えて調査を終了した。



第1図 赤迫遺跡これまでの調査位置図 (1/5,000)

(2) 元宮遺跡 1次調査の経緯

1次調査の発端は、平成10年7月に元宮遺跡1次調査地点の土地所有者から土砂採取工事中に人骨が出たとの通報を受け、市教育委員会文化課職員が現地に赴き確認したところ、箱式石棺と思われる墳墓内に人骨が見受けられ、埋蔵文化財と判断したことによる。

この行為に対して市教委は、1次調査地点付近では過去に大型成人用喪棺墓や石棺墓などが発見されており、今回発見された箱式石棺墓以外にも墳墓が広がる可能性が高いと考え、土地所有者に説明と理解を求め、工事を一時中断していただき、緊急の発掘調査を実施することとした。

調査は今回の遺構を記録保存できる範囲とし、他にも人骨が発見される可能性もあることから、表土剥ぎは作業員を使っての手作業で進めることとした。調査経過の概略は、次のとおりである。

- 7月14日 器材を搬入して、手作業で調査範囲の表土除去作業を始める。また、併行して遺構検出と石棺内に流入した土砂の除去作業を進める。
- 7月15日 石棺墓の石蓋を検出し、清掃後に写真撮影を行う。さらに、地形測量も行った。
- 7月16日 石棺墓の測量を行い、石蓋を取り上げて内部の清掃を行う。この日、人骨の調査を九州大学大学院の田中良之先生に依頼することが決まった。
- 7月17日 石棺墓の内部の一部掘り下げと清掃を行う。
- 7月18日 人骨の本格的な調査を開始し、午前中に人骨の出土状況の写真を撮影。午後から人骨の測量図の作成を行う。
- 7月19日 前日に引き続いて、人骨の測量図化や写真撮影を進める。
- 7月20日 人骨の取り上げ作業を行い、石棺墓の測量、写真撮影を行う。
- 7月21日 石棺墓の完掘による測量図の作成や写真撮影を行い、器材を撤収して全ての作業を完了する。



写真1 元宮遺跡1次調査の発掘調査風景

(3) 元宮遺跡 2次調査の経緯

2次調査区は前年度に事業者である財津管工より工事予定地として照会があった区域である。そこで事業者と協議を行い、掘削部分の緊急発掘調査を平成11年9月2日から10月1日まで行った。

調査経過の概略は以下の通りである。

- 9月2日 作業員による表土除去作業
- 9月3日 作業員による遺構検出作業
- 9月8日 遺構検出状況写真撮影
- 9月9日 個別遺構掘り下げ開始
- 9月28日 九州大学田中良之教授による甕棺墓出土人骨調査指導と甕棺墓内出土人骨実測
- 9月29日 九州大学田中良之教授・金宰賢助手(現東亜大学教授)甕棺墓出土人骨調査指導 溝口孝司助教授(現九州大学総合研究博物館教授) 来訪調査指導、甕棺墓内出土人骨実測取り上げ
- 10月1日 埋め戻しによる調査終了

(4) 元宮遺跡 6次調査の経緯

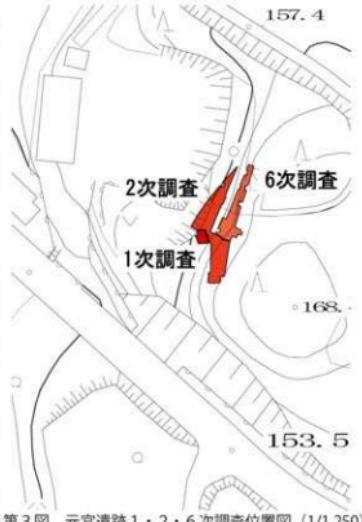
6次調査区は1次・2次調査が行われた東側隣接地であり、事業者である財津管工より1・2次調査区の東側をさらに拡張し土取工事に着手したい旨の連絡が入った。すでに1・2次調査では遺構が確認されていることから遺構の広がりが予想されるため、事業者と遺跡の取り扱いについて協議を行い、平成13年3月6日から3月12日まで緊急調査を実施することとなった。

調査経過の概略は以下の通りである。

- 3月6日 機械による表土除去作業
- 3月7日 作業員による遺構検出作業及び各遺構掘り下げ
- 3月8日 個別遺構写真撮影及び個別遺構実測及び全体写真撮影
- 3月9日・12日 調査区埋め戻し



第2図 元宮遺跡1～6次調査位置図 (1/5,000)



第3図 元宮遺跡1・2・6次調査位置図 (1/1,250)

(5) 調査の組織

平成 7 年度（赤追遺跡 G 区：予備調査）※職名は当時のままとしている。

調査主体　日田市教育委員会

調査責任者　加藤正俊（日田市教育委員会教育長）

調査指導員　賀川光夫（別府大学教授）、小田富士雄（福岡大学教授）、後藤宗俊（別府大学教授）、田中良之（九州大学教授）

調査事務　原田良伸（日田市教育委員会文化課長）、財津寅日出（同文化課長補佐兼文化財係長）、佐々木美保（同臨時職員）

調査担当　永田裕久（同主事補）

調査員　土居和幸（同主任）、行時志郎（同課主事）、松下桂子（同課主事補）、森山敬一郎（同課臨時職員）

作業員　猪熊スミ子、猪熊忠孝、猪熊誠、猪熊ヨネ、高村笑美子、手嶋トシエ、秋吉タミエ、佐藤節子、伊藤フジエ、谷頭忠雄、島田けさみ、森川寛夫、山本タケ

平成 8 年度（赤追遺跡 G 区）

調査主体　日田市教育委員会

調査責任者　加藤正俊（日田市教育委員会教育長）

調査指導員　小田富士雄（福岡大学教授）、後藤宗俊（別府大学教授）

調査事務　原田俊隆（日田市教育委員会文化課長）、長尾幸夫（同文化課長補佐兼文化財係長）、森山一宏（文化課主任）、衛藤和美（同臨時職員）、竹原里香（同臨時職員）

調査担当　永田裕久（同文化課主事補）

調査員　土居和幸（同課主任）、行時志郎（同課主事）、松下桂子（同課主事補）、森山敬一郎（同課臨時職員）

作業員　猪熊スミ子、猪熊忠孝、猪熊誠、猪熊ヨネ、高村笑美子、手嶋トシエ、秋吉タミエ、佐藤節子、伊藤フジエ、谷頭忠雄、島田けさみ、森川寛夫、山本タケ

平成 10 年度（元宮 1 次調査）

調査主体　日田市教育委員会

調査責任者　加藤正俊（教育長）

調査事務　原田俊隆（日田市教育委員会文化課長） 石井英信（同課長補佐兼文化財係長） 佐々木豊文（同課主任）

調査担当者　土居和幸（同課主任）

調査員　行時志郎（同課主任）、吉田博嗣（同課主事）、永田裕久（同課主事補）、山路康弘（同課嘱託）

発掘作業員　秋ヤエ子、諫山三代子、江藤キミ子、河津志保、庄内武子

調査協力者　長谷川正美

平成 11 年度（元宮 2 次調査）

調査主体　日田市教育委員会

調査責任者　加藤正俊（日田市教育委員会教育長）

調査指導員　賀川光夫（別府大学名誉教授）、小田富士雄（福岡大学教授）

調査事務　原田俊隆（日田市教育委員会文化課長）、石井英信（同課長補佐）、佐々木豊文（同課主査）、美野寿美香（同課臨時職員）～平成 12 年 3 月　江田香織（同課臨時職員）平成 12 年 4 月～
調査担当　行時志郎（同課主任）
調査員　土居和幸（同課主任）～平成 12 年 3 月、吉田博嗣（同課主任）、若杉竜太（同課主事）、渡邊隆行（同課主事）平成 12 年 4 月～
調査作業員　一ノ宮嘉蔵、小野忠臣、小下一、五反田静子、坂本今朝人、坂本都美子、財津由太、財津利枝、清水忠造、高倉美利、高倉富美子、高野暉、田中昇、野村勉、本田早苗、本田忠勝、松岡初次、三浦陽子、吉弘昇、渡辺芳五郎
整理作業員　穴井トヨ子、朝倉真佐子

平成 12 年度（元宮 6 次調査）

調査主体　日田市教育委員会
調査責任者　加藤正俊（日田市教育委員会教育長）～平成 12 年 11 月 14 日
後藤元晴（日田市教育委員会教育長）平成 12 年 11 月 15 日～
調査指導員　賀川光夫（別府大学名誉教授）、小田富士雄（福岡大学教授）、下村智（別府大学助教授）
調査事務　原田俊隆（日田市教育委員会文化課長）、石井英信（同課長補佐兼文化財係長）、佐々木豊文（同課主査）、江田香織（同課臨時職員）
調査担当　行時志郎（同課主任）
調査員　吉田博嗣（同課主任）、若杉竜太（同課主事）、渡邊隆行（同課主事）
作業員　穴井昌生、一ノ宮嘉蔵、五反田静子、佐藤孝市、清水忠造、財津由太、財津利枝、高倉美利、高倉富美子、田中昇、筒井英治、松岡初次、本田忠勝、本田早苗、平原知義

平成 25 年度（報告書作成）

調査主体　日田市教育委員会
調査責任者　合原多賀雄（日田市教育委員会教育長）
整理統括　財津俊一（文化財保護課長）
整理事務　園田恭一郎（文化財保護課埋蔵文化財係長）、草藤善紹（同課副主幹）
報告書作成　土居和幸（日田市老人福祉センター業務係長）、行時志郎（日田市立博物館副主幹）
若杉竜太（文化財保護課埋蔵文化財係主査）、上原翔平（同課主任）
調査員　行時桂子、渡邊隆行（以上、文化財保護課埋蔵文化財係主査）
整理作業員　伊藤一美、黒木千鶴、武石和美、安元百合、高田美保（平成 25 年 5 月～）

第2章 遺跡の立地と環境

日田市は、大分県西部に位置し、西は福岡県、南は熊本県と接している。また、日田市街地の中心を流れる三隈川（玖珠川より下流、夜明地区周辺よりも上流区間の筑後川の呼び名）は、阿蘇を源流とし、日田盆地で小河川と合流する。その後、下流に向かって流域面積を広げながら福岡県に入り、有明海に注いでいる。

日田盆地は地形的には、大肥川・三隈川の合流点より上流を指す。この合流点付近では標高が最も低く約65m、盆地中心では約75m～90mである。これらの盆地地形はその外側に阿蘇4火砕流の堆積面に緩傾斜の平坦面が広がる。盆地東部の一尺八寸山（みおやま）と月出山（かんとう）岳の間に200～560mの急傾斜面があり、その東方には耶馬渓火砕流によって形成された平坦面が標高400～600mの間に広がっている。更にその上に一尺八寸山、月出山岳が一部緩傾斜面をなしつつ、残丘状に突出する。一方、盆地内では小河川が形成した段丘面、沖積面が広がり、また周囲の浸食により形成された月隈山、星隈山、日隈山、隈山などの残丘が見られる。こうした地形によって形成されている日田盆地にあって、今回報告する赤迫遺跡は、東部の中尾原台地南端付近から派生し、舌状に伸びる標高約120m、南北長約150mの尾根上に位置している。

遺跡周辺には、5世紀中頃の円墳で筒埴輪や太刀形埴輪が出土している県指定史跡の薬師堂山古墳、井桁組の井戸や「林」・「門」などの墨書き土器が発見され出土し、公的施設の存在が推定される大波羅遺跡が所在する。また、今回報告する赤迫遺跡の隣接地では過去に市営の総合運動公園建設に伴い調査が行われており（A～F区）、市内で初の出土例となった木製の下駄などが発見されるなど、縄文時代～近世にかけての遺構が検出されている。

元宮遺跡は、その東部の通称「元宮原」と呼ばれる台地・丘陵上に所在する。今回の調査区は、元宮台地が見下ろせる標高155m前後の小高い丘陵平坦部にある。元宮原台地の北側から東側にかけては、求来里川によつて浸食された谷地形や、大山川と三隈川が合流する地点にあたる南側では、阿蘇4火砕流堆積面を浸食した河岸段丘が発達している。

元宮遺跡は、今回報告する調査の他にも3回（3～5次）の調査が行われており、同じ丘陵上に位置する3次調査では、明確な時期は不明だが石蓋土坑墓や箱式石棺墓が確認されている他、古墳時代後期の土坑墓や中世の塚や笠塔婆が発見されており、この丘陵一帯が墓域として利用されていた可能性が指摘される。また、4次調査は、農道建設の際に行われた調査で近現代の土坑が検出されている。5次調査は、造成工事の際に行われた調査で明確な遺構は検出されていないが、古代の瓦や土師器が出土されている。

このように元宮遺跡周辺には多くの調査事例があり、求来里川沿いの下流に位置する元宮遺跡の丘陵を北に下った地点にある馬形遺跡からは、古墳時代の竪穴式住居や壠立柱建物のほか、中国越州系青磁碗片を伴った古代の木棺墓も発見されている。また、元宮遺跡南東の独立丘陵上には7基の円墳が群集する法恩寺山古墳群があり、その内、3号墳は市内で4例しか見つかっていない装飾古墳の1つで、円文・同心円文・馬・鳥・人物が描かれており、須恵器・馬具・玉類が出土している。

（参考文献）

行時志郎「赤迫遺跡」『平成6年度（1994）日田市埋蔵文化財年報』1996

永田裕久「赤迫遺跡G地点」『平成7度（1995）日田市埋蔵文化財年報』1997

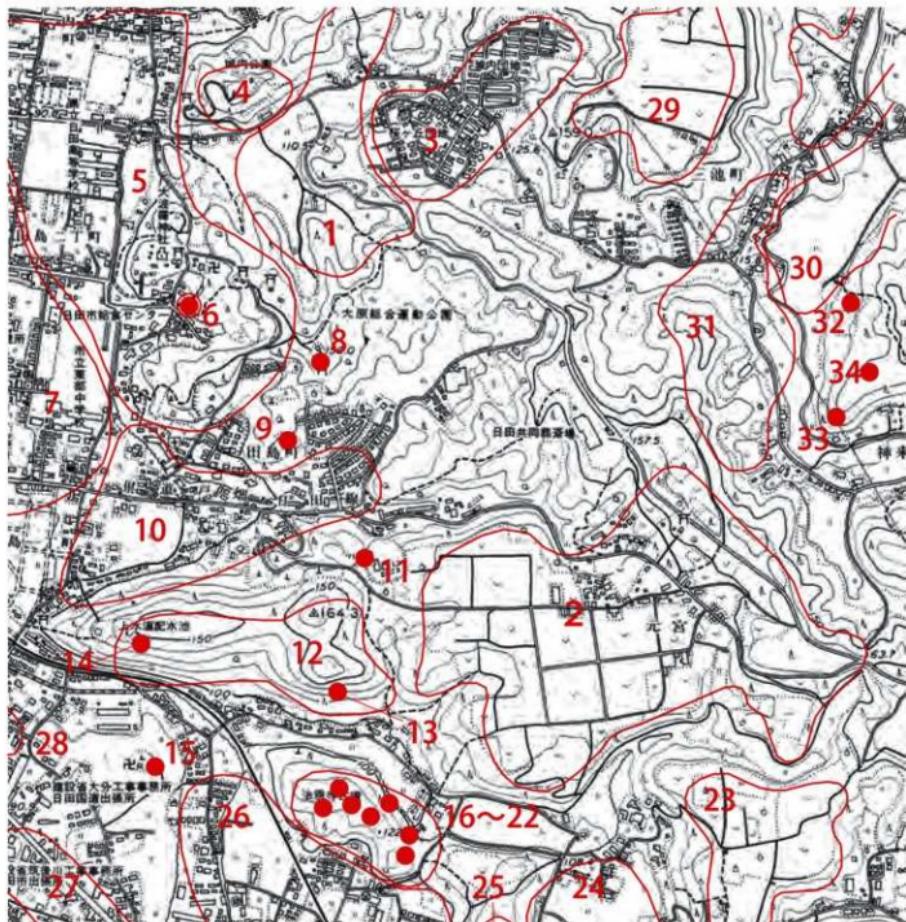
上居和幸・行時志郎・永田裕久「馬形遺跡」日田市埋蔵文化財調査報告書第16集 日田市教育委員会 1998

上居和幸「元宮遺跡」『平成10年度（1999）日田市埋蔵文化財年報』2000

行時志郎「元宮遺跡」『平成11年度（2000）日田市埋蔵文化財年報』2001

若杉竜太・行時志郎「元宮遺跡」日田市埋蔵文化財調査報告書第25集 日田市教育委員会 2000

若杉竜太「求来里的遺跡IV」日田市埋蔵文化財調査報告書第102集 日田市教育委員会 2012



1 赤迫遺跡	8 丸尾神社古墳	15 鬼塚古墳	28 入龍遺跡
2 元宮遺跡	9 丸尾古墳	16~22 法恩寺古墳1~7号墳	29 中尾原遺跡
3 湯尻遺跡	10 会所宮遺跡	23 東寺原遺跡	30 森ノ元遺跡
4 堤城跡	11 田島古墳	24 日高遺跡	31 馬形遺跡
5 大波羅遺跡	12 会所山遺跡	25 平松遺跡	32 戸二タ3号墳
6 薬師堂山古墳	13 会所山古墳	26 上井手遺跡	33 戸二タ1号墳
7 条里跡（日田条里）	14 烏羽塚古墳	27 柳ノ木遺跡	34 戸二タ2号墳

第4図 赤迫・元宮遺跡周辺遺跡図 (1/20,000)

第3章 赤迫遺跡G区の調査

(1) 調査の概要 (第5図)

本調査区は、赤迫遺跡の中でも南側、大波羅丘陵北側の八つ手状に延びる舌状丘陵の1つに位置する。調査区南側の同じ丘陵状には丸尾神社古墳が存在する。調査区については、範囲を特に設定せずに、前章で述べたように、風倒木の除去を行ない、遺構検出によって確認された墓についてのみ実施した。

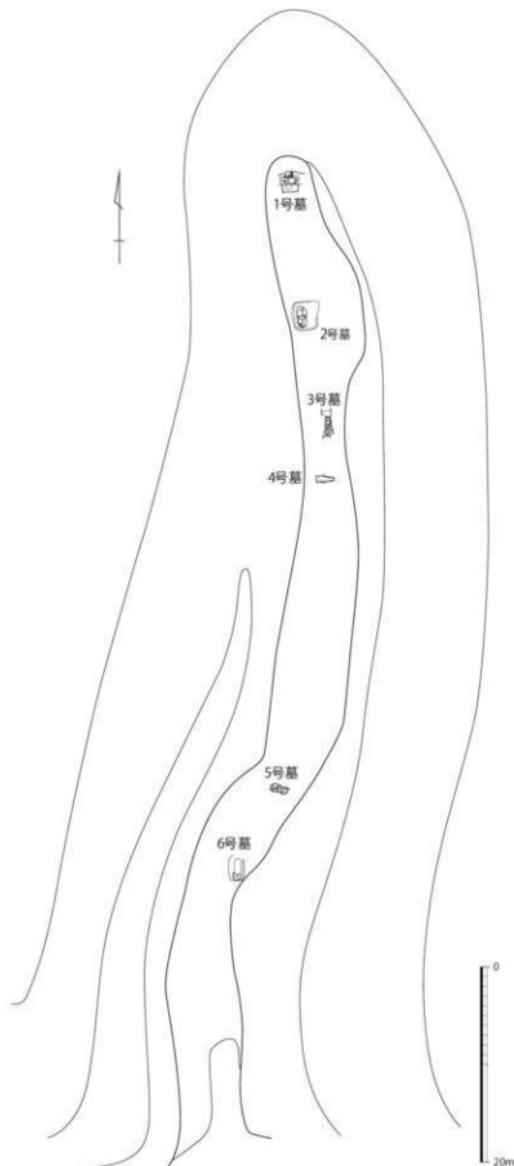
(2) 遺構・遺物について

墓は、舌状丘陵の尾根上に南北に並ぶよう6基が検出された(第5図)。そのうち、1~4号墓は尾根の北端から約30mの間に4基、その南側約30m、約40mの位置にそれぞれ5号墓、6号墓が確認された。なお、1・2・4・6号墓からは人骨が出土しているが、詳細については、第7章を参照されたい。

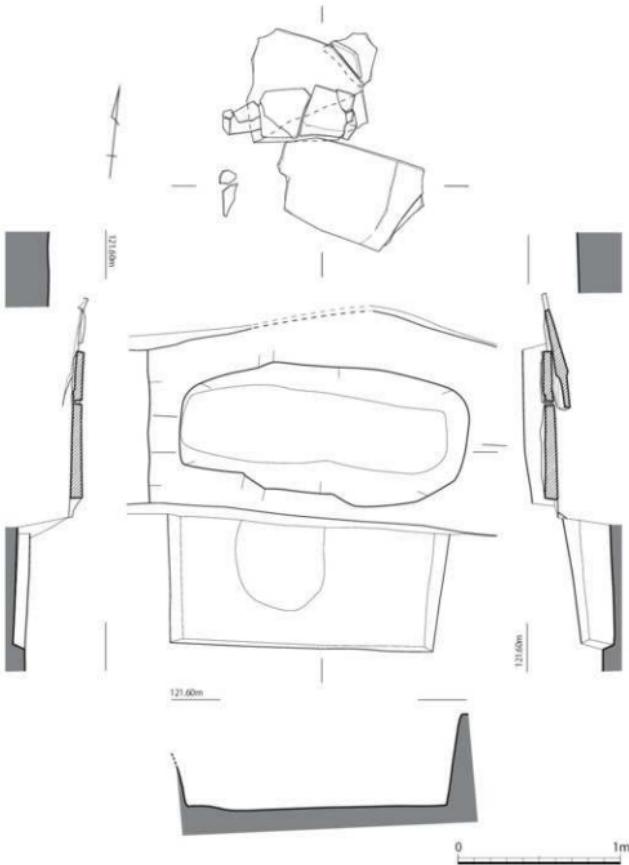
1号墓 (第6・7図 図版7)

この墓は、尾根の北端で確認され、主軸をN・84°・Eにとる石蓋土坑墓である。墓坑の平面形は、床面の平面形からやや隅丸の長方形を呈していたと思われ、規模は、長軸1.77m、短軸0.79m、検出面からの深さは約55cmである。蓋は大きさ0.7~1.0mの前後の板石を2枚配し、その上にやや小ぶりな板石を置いている。南側の蓋石については、墓坑の位置とずれているため、原位置を保っていないものと考えられる。

墓坑の内法は、長軸1.64m、短軸0.42mを測り、壁は急傾斜で立ち上がる。床面は、東から西に向かって、緩やかに傾斜している。また、人骨体が出土しており、少なくとも2体分の頭蓋骨の出土位置から東西側からそれぞれが頭位と考えられる。



第5図 周辺地形測量図及び遺構配置図 (1/500)



第6図 1号墓実測図 (1/30)

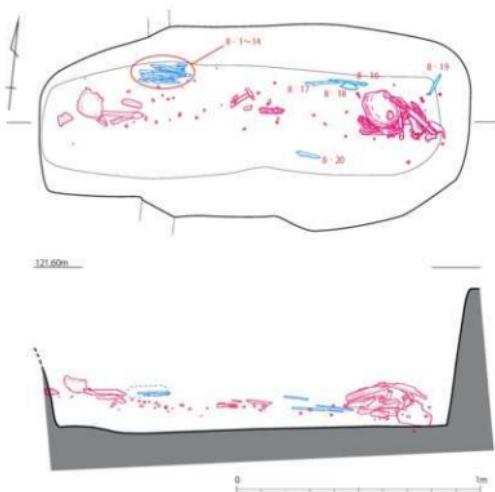
内部からは人骨と鉄鎌・刀子が出土した。鉄鎌は足側と長側辺南壁の中央よりやや東寄りで14本がまとまった状態で出土し、その他は西側で数本確認された。

出土遺物 (第8図 図版15)

1～18は鉄鎌で、1～17は長頭鎌、18は短頭鎌である。13は2本の鉄鎌が付着する。これは、いずれも鎌身形態は柳葉形であり、15も同様と思われる。また、13・15は闇の形態が直角に近い。鎌身部の断面形態については、長頭族が鋸で明確でないものもあるものの、ほとんどが両刃両丸造とみられる、18が両刃の平造である。また、長頭鎌のほとんどが鎧被を持つが、棘状に突出するのはみられない。

この他、3～5、11、14、15に茎部のほうに木質が残り、3と11は樹皮の痕跡、5は刃部から鎌身部から鎧被部にかけて布目が残る。7・8には別の遺物が付着する。

19・20は刀子である。19は茎部先端が欠損し、20はほぼ完形である。刃部は19に比べ、20はやや細身である。また、2つとも茎部に木質が残る。



第7図 1号墓遺物・人骨出土状況実測図 (1/20)

2号墓 (第9・10図 図版7)

この墓は、1号墓の12m南側で確認され、主軸をN-5°-Wにとる石蓋上坑墓である。墓坑の平面形は、元々床面の形状から、長方形を呈していたと思われるが、短辺南側は丸味を帯び、壁の立ち上がりの状況から肩が崩落したものと推定される。規模は長軸1.77m、短軸0.79m、検出面からの深さは最も深い部分で約80cmである。

墓坑の内法は長軸1.75m、短軸0.47mを測る。壁は短辺北側がほぼ直立するのに対し、前述の短辺南側に加え、両長辺側の壁も立ち上がりの状況から、若干の崩落があったものと考えられる。床面の南側に地山削り出しの枕がみられ、頭位は南方向であることがわかる。また、床面の傾斜は、中央付近がややくぼむものの、ほぼ水平である。

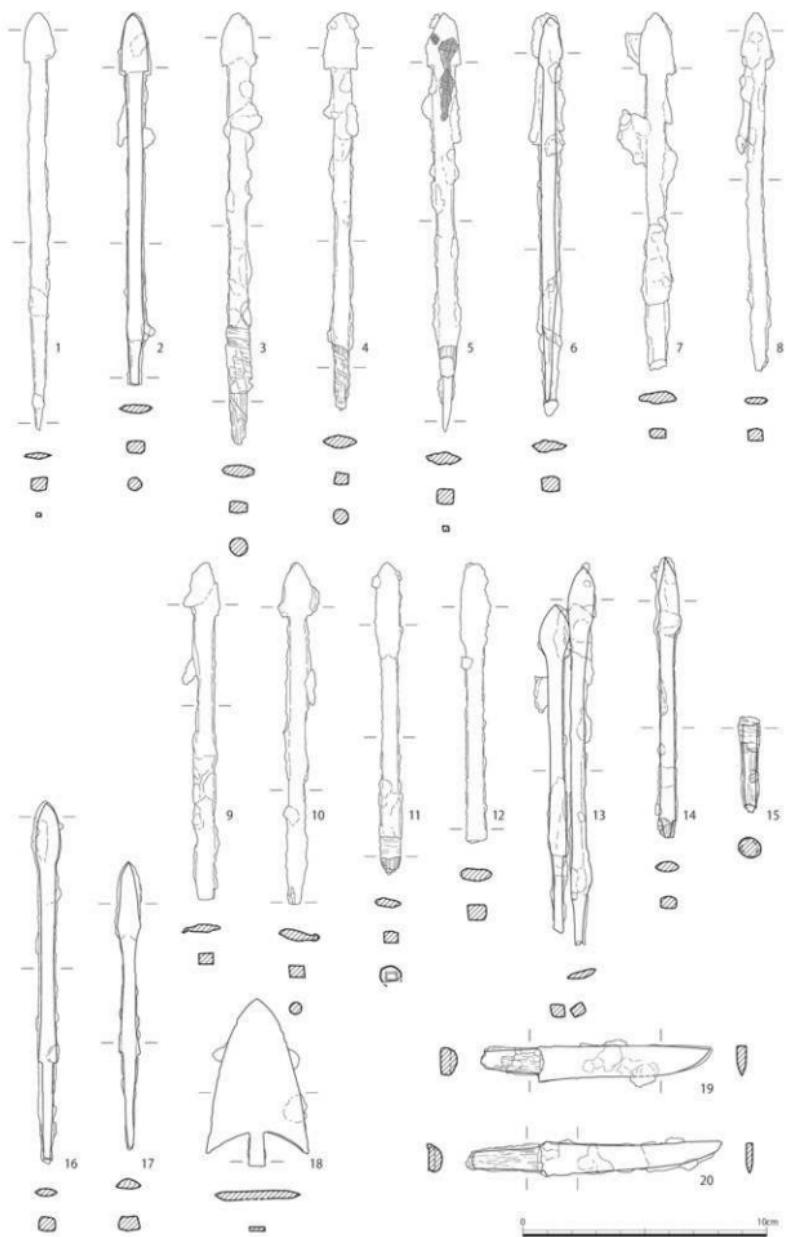
蓋は、大きさ1.0m前後の板石を2枚配し、その間に幅40cm前後的小ぶりな板石を置く。2枚の大きな板石はそれぞれ中央付近で、墓坑内部に落ち込むような状態で確認された。これは、前述の壁の崩落によるものと考えられる。

内部からは人骨のほか、小玉が出土した。

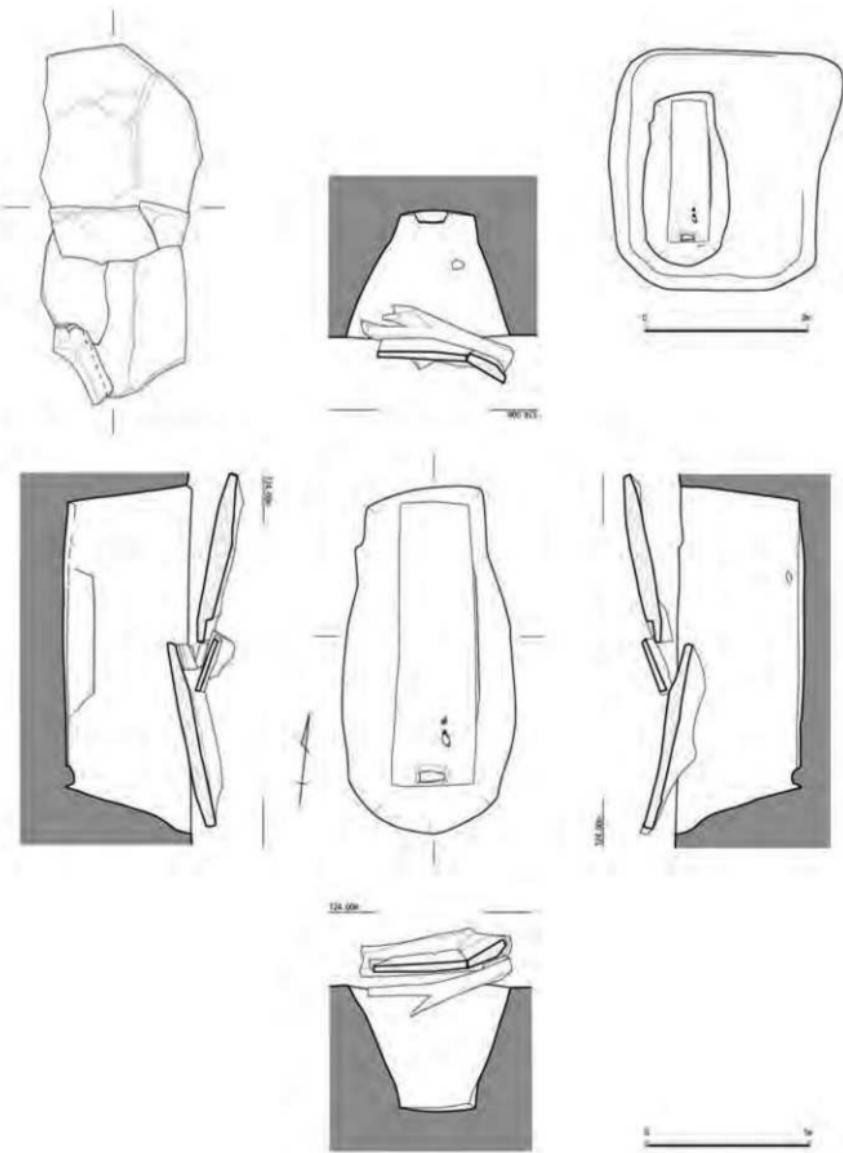
出土遺物 (第11図 図版15)

1～4はガラス製、5は滑石製の小玉である。1は瑠璃色を呈し、長さ0.5cm、幅0.6cm、孔径0.15cm、重さ0.227g、2は瑠璃色を呈し、長さ0.3cm、幅0.5cm、孔径0.15cm、重さ0.096g、3は瑠璃色を呈し、長さ0.5cm、幅0.5cm、孔径0.15cm、重さ0.188g、4はターコイズブルーを呈し、長さ0.2cm、幅0.3cm、孔径0.1cm、重さ0.024g、5は灰色を呈し、長さ0.15cm、幅0.25cm、孔径0.1cm、重さ0.021g以下である。大きさは0.5cm前後の1～3と0.2cm前後の4・5の2種類見られる。

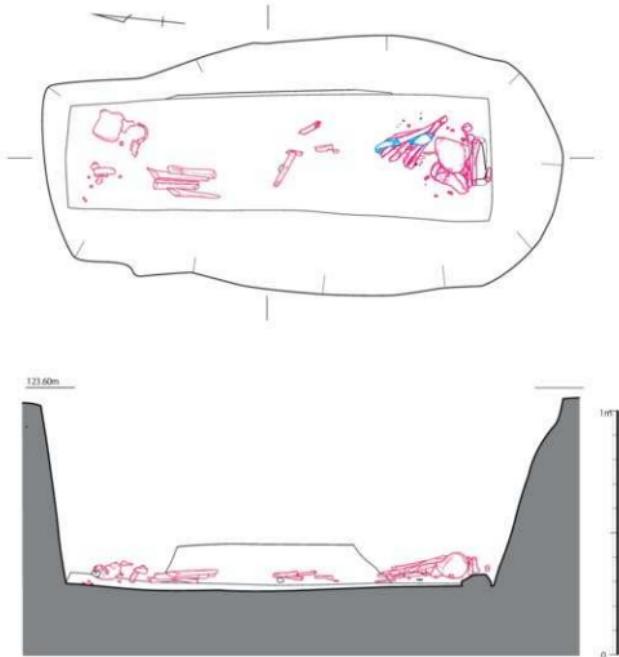
6～12はガラス製、13～20は滑石製の小玉で灰色を呈する。6はターコイズブルーを呈し、長さ・幅ともに0.5cmで孔径は0.15cm、重さは0.132g、7はターコイズブルーを呈し、長さ0.25cm、幅0.35cm、孔径0.1cm、重さ0.044g、8はターコイズブルーを呈し、長さ0.45cm、幅0.5cm、孔径0.1cm、重さ0.139



第8図 1号墓出土遺物実測図 (1/2)

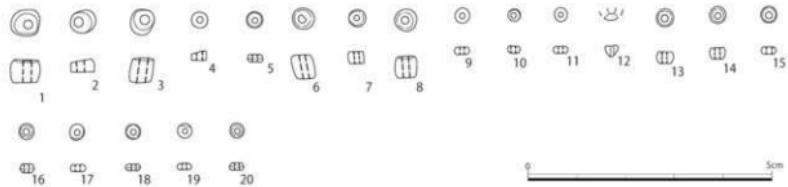


第9図 2号墓実測図 (1/30、1/60)

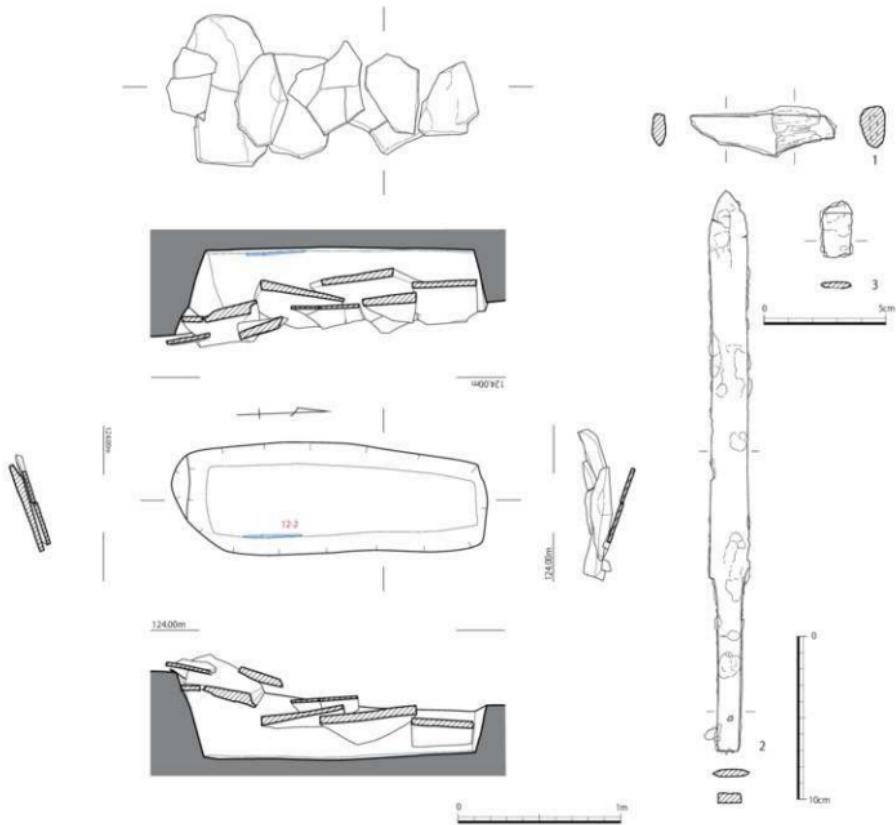


第10図 2号墓遺物・人骨出土状況実測図 (1/20)

g、9は瑠璃色を呈し、長さ0.15cm、幅0.25cm、孔径0.1cm、重さは0.022g、10は明るい瑠璃色を呈し、長さ0.15cm、幅0.25cm、孔径0.1cm、重さ0.017g、11はターコイズブルーを呈し、長さ0.15cm、幅0.3cm、孔径0.1cm、重さは0.018g、12はターコイズブルーを呈する。そのほとんどを欠損しており、中央の糸通しの穴の壁面が一部残存する。長さは0.2cm残存、幅は0.3cm残存している重さは0.012g、13は長さ0.25cm、幅0.35cm、孔径0.1cm、重さ0.042g、14は、長さ0.25cm、幅0.35cm、孔径0.1、重さ0.036g、15は、長さ0.15cm、幅0.3cm、孔径0.1cm、重さ0.021g、16は、長さ0.2cm、幅0.3cm、孔径0.1cm、重さ0.022g、17は、長さ0.15cm、幅0.3cm、孔径0.1cm、重さ0.021g、18は、長さ0.15cm、幅0.3cm、孔径0.1cm、重さ0.022g、19は長さ0.1cm、幅0.3cm、孔径0.1cm、重さ0.016g、20は、0.15cm、幅0.3cm、孔径0.1cm、重さ0.022gである。



第11図 2号墓出土遺物実測図 (1/1)



第12図 3号墓実測図(1/30)及び出土遺物実測図(1・3:1/2、2:1/3)

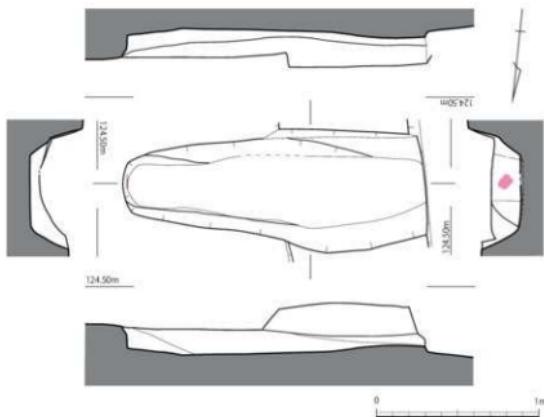
3号墓(第12図 図版8)

この墓は、2号墓の9m南側で確認され、主軸をN - 2° - Eにとる石蓋土坑墓である。墓坑の平面形は、床面の形状から元々長方形を呈したと思われるが、短辺北側はやや丸味を帯びており、肩の崩落によるものと推定される。規模は長軸 1.91 m、短軸 0.79 m、検出面からの深さは、最も深い部分で約 60cm である。

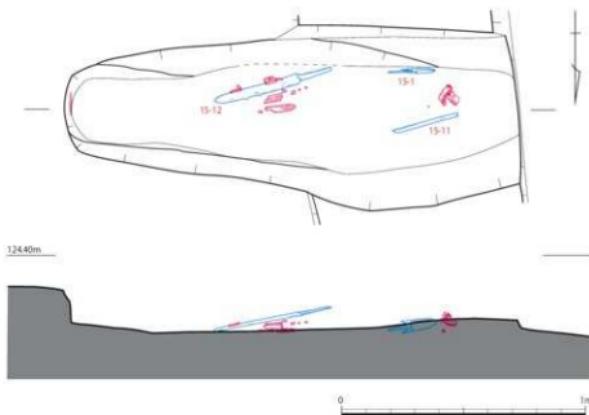
墓坑の内法は長軸 1.66 m、短軸 0.39 m を測り、短辺北側の方がやや崩れているものの、いずれも急傾斜で立ち上がる。床面は南側から北側に向かって、緩やかに傾斜する。

蓋は、大きさ 1.0 m × 0.5 m 前後の板石 1 枚と 0.5 m 前後の板石を 7 枚ほどで鉛重ねで配している。北側は墓坑上面より上位に位置しているが、南側へ向かうほど、墓坑内に落ち込んでいる。

内部からは、鉄剣 1 本、刀子 1 点が出土したほか、鉄剣の破片が表採されている。



第13図 4号墓実測図 (1/30)



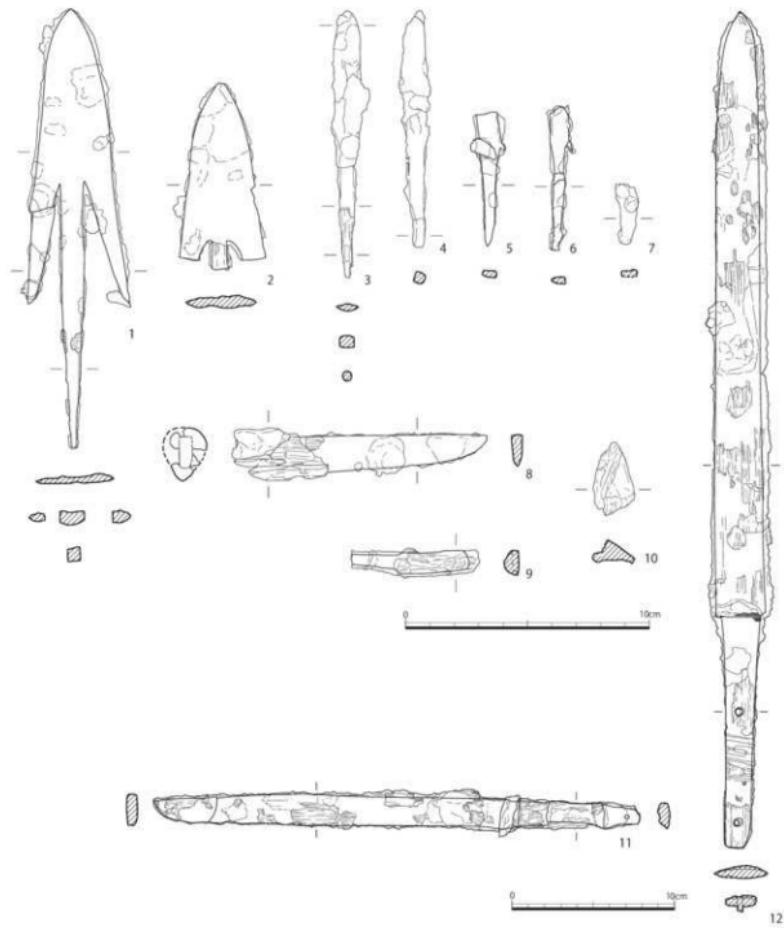
第14図 4号墓遺物・人骨出土状況実測図 (1/20)

出土遺物（第12図 図版15）

1は刀子である。刃部と茎部の一部のみが残存する。茎部には木質が残る。2は鉄剣で、ほぼ完形である。柄部には、目釘穴が1ヶ所穿たれている。3は器種不明。

4号墓（第13・14図 図版8）

この墓は、3号墓の4m南側で確認され、主軸をN-90°-Eにとる土坑墓である。蓋については、石材が残っていないためはっきりしないが、この墓が1~3号墓と一連のものと考えられることから、石蓋があった可能性が高いだろう。墓坑の平面形は、床面の形状等から隅丸長方形を呈したと思われ、東端が削平を受けている。また、西側半分も東側に比べ、約15cm削られている。規模は長軸1.86m+α、短軸0.74m、検出面からの深さは、

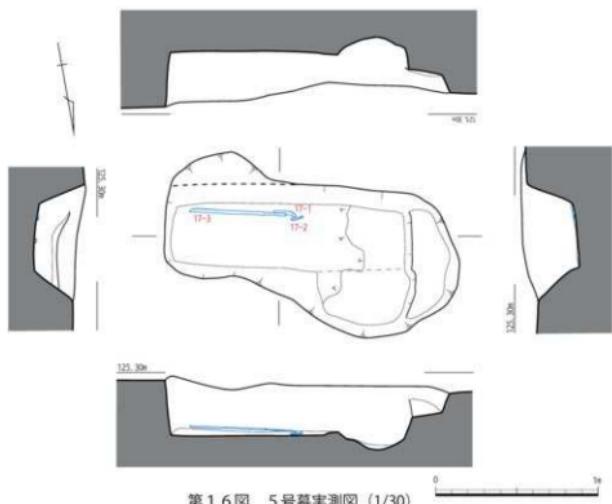


第15図 4号墓出土遺物実測図 (1~10:1/2, 11・12:1/3)

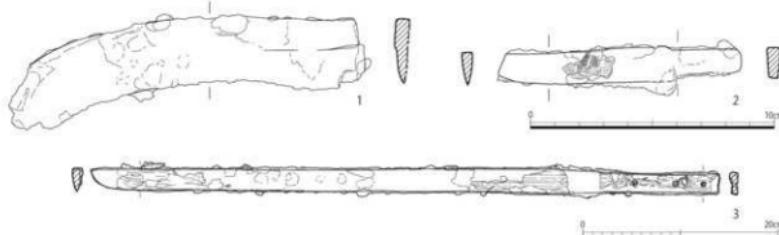
最も深い部分で約30cmである。

墓坑の内法は長軸 $1.84\text{ m} + \alpha$ 、短軸 0.45 m を測り、壁は短辺西側がほぼ直立して立ち上がり、長辺は両側とも立ち上がりは緩やかである。床面は東側から西側に向かって、緩やかに傾斜する。また、人骨が出土しているが、歯の出土位置から東側が頭位と考えられる。内部からは、人骨とともに鉄剣、鉄刀、鐵鎌、刀子が出土した。出土遺物（第15図 図版15・16）

1~7は鐵鎌で、1~4は短頭鎌で、5も同様と思われる。6・7については、短頭か長頭かの判断は難しい。1の鎌身は柳葉形で、脇抉の逆刺を有する。2の鎌身は長三角形を呈する。3・4の鎌身形態も柳葉形であるが、1とは異なり、幅広で逆刺を有さないタイプである。また、5には棘状の鎧被がみられる。このほか、2・3には木質が残る。



第16図 5号墓実測図 (1/30)



第17図 5号墓出土実測図 (1・2:1/2、3:1/5)

8・9は、刀子で、ともに木質が残る。8には鹿角製の装具が付着している。10は材質が木もしくは骨であるが、器種は不明である。最大長3.0cm、最大幅1.7cm、最大厚0.9cm。

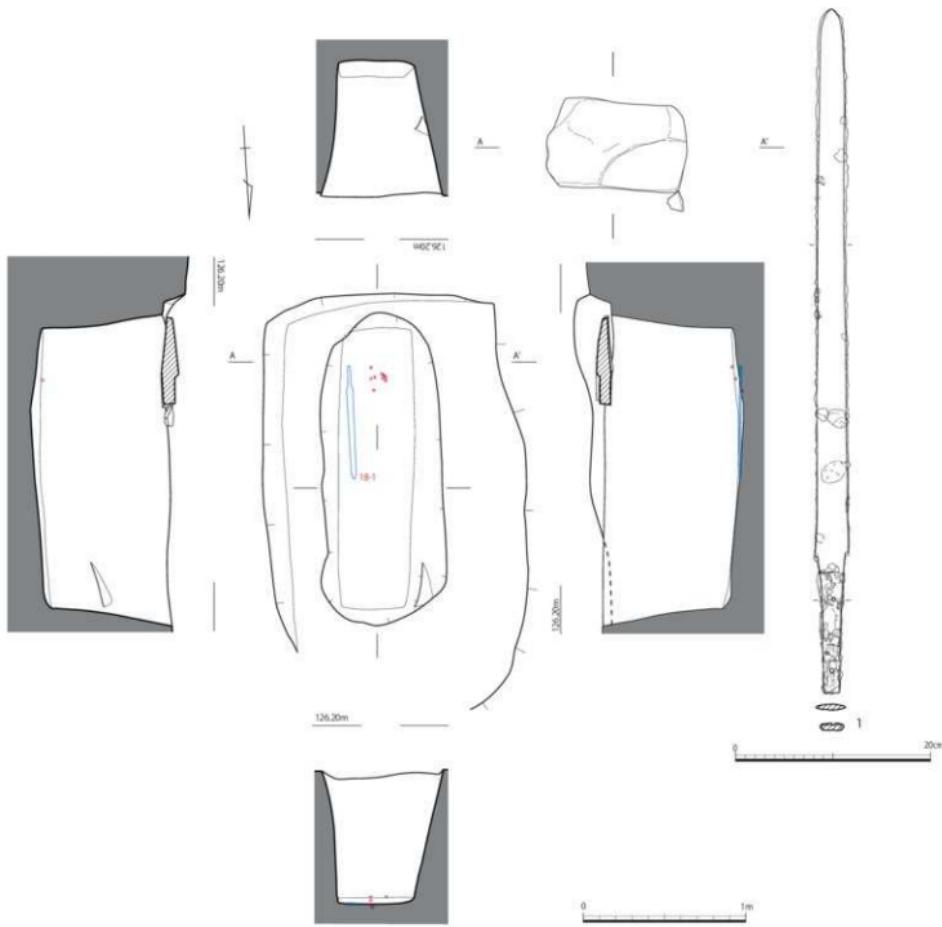
11は鉄刀、12は鉄剣である。11はほぼ完形で、全体に木質が残る。関部には鹿角製の刀装具の一部が残る。12はほぼ完形であり、全体に木質、関部には布目痕もしくは紐痕が残る。把部の目釘穴は2ヶ所に穿たれている。

5号墓（第16図 図版8）

この墓は、4号墓から約31m離れた南側で確認され、主軸をN-80°Wにとる土坑墓である。蓋については、石材が残っていないため、はっきりしない。墓坑の平面形は、床面の形状等から元々長方形を呈したと思われるが、長側辺北側の西側、同南側の大部分が崩れており、原形は留めていないと思われる。規模は長軸1.75m、短軸が現状で約0.7mを測る。床面は東側から西側に向かって、緩やかに傾斜するが、東側は2段掘りのようになっており、その下部は床面より深く掘削を受けている。この状況から検出面からの深さは、床面が明確に残っている部分で32cmを測る。

墓坑の内法は下段で1.42m、東側の上段まで含むと1.67m、短軸0.40mを測り、壁は短辺両側が急傾斜で立ち上がるのに対し、長側辺は両側とも緩やかな立ち上がりである。

内部からは、鉄刀、鉄鎌、刀子が出土した。頭位方向については、次に述べる6号墓の鉄剣が頭位から出土しており、この墓も同様に鉄刀の出土位置が頭位とすれば、西側になると推定される。



第18図 6号墓実測図(1/30)及び出土遺物実測図(1/5)

出土遺物(第17図 図版15)

1は、鉄鎌である。2は、刀子で一部に木質が残る。3は、ほぼ完形の鉄刀である。全体に木質が残り、柄部には目釘穴が3ヶ所穿たれている。

6号墓(第18図 図版8)

この墓は、4号墓から約8m南側で確認され、主軸をN - 4° - Eにとる石蓋土坑墓である。蓋は短辺北側に約90cm × 50cmの板石が1枚残っている。墓坑は2段掘りになっており、1段目は北側短辺と西側長辺の一部しか残っていない。しかし、平面形は1・2段目とともに床面の形状等から元々長方形を呈したと思われる。また、2段目の短辺北側でやや肩の崩落がみられる。規模は1段目の北側短辺が約1.5m、西側長辺が約2m

残存する。2段目は長軸 1.75 m、短軸が 0.74 m を測る。床面は中央よりやや北側がやや深くなっている、この部分で検出面からの深さが約 1.0 m である。

墓坑の内法は下段で 1.42 m、東側の上段まで含むと 1.72 m、短軸 0.44 m を測り、壁はいずれもほぼ直立して立ち上がる。また、人骨の歯が出土しており、その位置から北側が頭位と考えられる。

内部からは、人骨のほか、鉄剣 1 振が出土した。

出土遺物（第 18 図 図版 1 6）

1 は、ほぼ完形の鉄剣である。木質が残るが、そのほとんどは柄部に残る。また、柄部には目釘穴は 3ヶ所穿たれている。

第 1 表 赤追跡 G 区出土鉄器観察表

挿図番号	図版番号	遺構名	器種	最大長 (cm)	最大幅 (cm)	最大厚 (cm)	重量 (g)	備考
第 8 図 1	15	1 号墓	鉄劍	17.1	1.3	0.6	16.9	長頸鑑、柳葉形
第 8 図 2	15	1 号墓	鉄劍	15.2	1.4	0.5	20.4	長頸鑑、柳葉形
第 8 図 3	15	1 号墓	鉄劍	17.7	1.5	0.7	26.8	長頸鑑、柳葉形
第 8 図 4	15	1 号墓	鉄劍	16.3	1.3	0.6	24.2	長頸鑑、柳葉形
第 8 図 5	15	1 号墓	鉄劍	17.1	1.4	0.6	25.4	長頸鑑、柳葉形
第 8 図 6	15	1 号墓	鉄劍	16.5	1.2	0.6	25.5	長頸鑑、柳葉形
第 8 図 7	15	1 号墓	鉄劍	14.6	1.5	0.4	25.1	長頸鑑、柳葉形
第 8 図 8	15	1 号墓	鉄劍	14.6	1.2	0.5	17.0	長頸鑑、柳葉形
第 8 図 9	15	1 号墓	鉄劍	13.8	1.5	0.4	16.0	長頸鑑、柳葉形
第 8 図 10	15	1 号墓	鉄劍	14.0	1.7	0.5	19.4	長頸鑑、柳葉形
第 8 図 11	15	1 号墓	鉄劍	12.7	1.0	0.5	16.4	長頸鑑、柳葉形
第 8 図 12	15	1 号墓	鉄劍	11.5	1.3	0.6	15.9	長頸鑑、柳葉形
第 8 図 13 左	15	1 号墓	鉄劍	13.5	1.3	0.5	35.0	長頸鑑、柳葉形 重量は左右の合計
第 8 図 13 右	15	1 号墓	鉄劍	15.6	1.2	0.5		
第 8 図 14	15	1 号墓	鉄劍	11.5	1.1	0.5	13.4	長頸鑑、柳葉形
第 8 図 15	15	1 号墓	鉄劍	3.9	0.9	0.9	3.3	長頸鑑
第 8 図 16	15	1 号墓	鉄劍	14.8	1.2	0.6	20.0	長頸鑑、柳葉形
第 8 図 17	15	1 号墓	鉄劍	11.8	1.1	0.6	13.0	長頸鑑、柳葉形
第 8 図 18	15	1 号墓	鉄劍	6.8	4.2	0.4	16.5	短頸鑑、柳葉形
第 8 図 19	15	1 号墓	刀子	9.5	1.5	0.4	18.4	
第 8 図 20	15	1 号墓	刀子	10.5	1.4	0.3	9.9	
第 12 図 1	15	3 号墓	刀子	6.0	2.1	1.0	11.0	
第 12 図 2	16	3 号墓	鉄劍	34.4	2.6	0.6	90.9	
第 12 図 3	—	3 号墓	不明	2.3	1.4	0.2	3.1	表採資料
第 15 図 1	15	4 号墓	鉄劍	18.0	4.5	0.6	53.1	短頸鑑、柳葉形
第 15 図 2	15	4 号墓	鉄劍	7.7	3.5	0.2	19.2	短頸鑑、長三角形
第 15 図 3	15	4 号墓	鉄劍	11.0	1.2	0.5	16.2	長頸鑑、柳葉形
第 15 図 4	15	4 号墓	鉄劍	9.7	1.3	0.5	16.6	長頸鑑、柳葉形
第 15 図 5	15	4 号墓	鉄劍	5.5	1.8	0.3	3.9	長頸鑑
第 15 図 6	15	4 号墓	鉄劍	5.9	1.2	0.3	2.9	長頸鑑
第 15 図 7	15	4 号墓	鉄劍	2.5	0.9	0.3	1.2	長頸鑑
第 15 図 8	15	4 号墓	刀子	10.5	2.2	1.5	21.1	
第 15 図 9	15	4 号墓	刀子	5.3	1.1	0.6	5.8	
第 15 図 11	16	4 号墓	鉄刀	29.9	1.9	0.7	93.7	
第 15 図 12	16	4 号墓	鉄劍	51.6	4.0	0.8	304.6	
第 17 図 1	15	5 号墓	鉄劍	14.8	2.9	0.5	75.3	
第 17 図 2	15	5 号墓	刀子	10.0	0.5	0.6	18.6	
第 17 図 3	15	5 号墓	鉄刀	64.5	3.2	1.0	443.6	
第 18 図 1	16	6 号墓	鉄劍	70.1	3.6	0.7	381.8	

第4章 元宮遺跡1次の調査

(1) 調査の概要 (第19図)

元宮遺跡1次調査区は、通称元宮原台地が見下ろせる頂部の標高が167.9mの小高い丘の西側にあたる緩やかな傾斜地にある。1次調査区の表土下は暗茶褐色のローム質土で、遺構の地山にあたる。

今回の石蓋土坑墓は工事中の発見であったため遺構の残りは決して良くなく、遺構の約半分近くが既に削平を受け、かろうじて人骨も頭蓋骨を中心とした部位が残存していた。

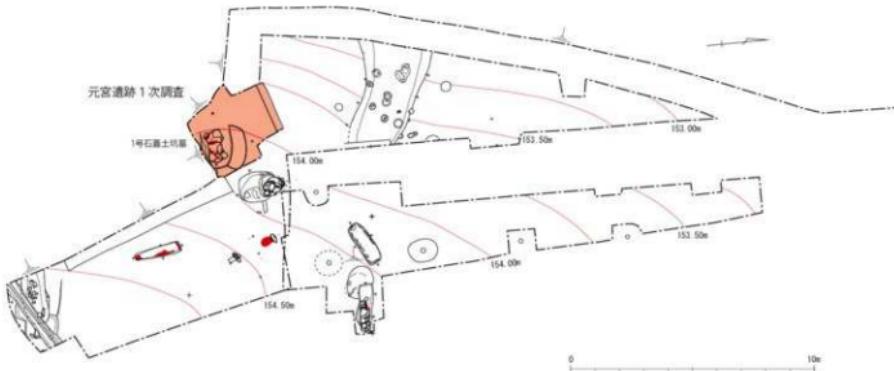
調査中は、石蓋土坑墓のほかにも墳墓の想定を行いながら進めたが、石蓋土坑墓以外の墳墓は確認できず、1次調査区での遺構は石蓋土坑墓1基と判断した。この石蓋土坑墓からは人骨1体が確認され、人骨の調査は九州大学大学院に依頼し、取り上げた人骨は同大学院で保管いただいている。

なお、1次調査の調査面積は、9.2m²である。

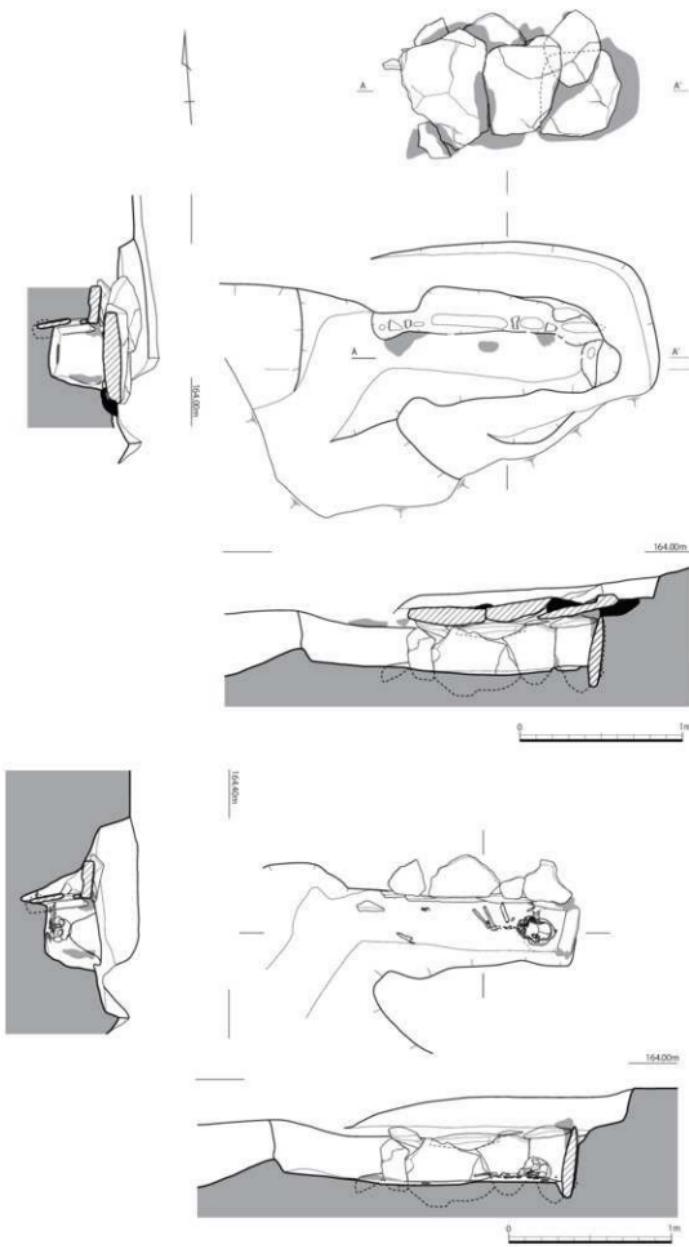
(2) 遺構・遺物について

1号石蓋土坑墓 (第20図、図版9~11)

この墓は二段掘りの石蓋土坑墓で、一段目の墓坑は長軸1.8m+a、短軸1.1m+aを測る。二段目の土坑内には頭蓋骨や肋骨、上股骨などの人骨が残っており、その位置からして、頭位部から安山岩製の扁平な板石を甲重ねとした石蓋が残っていた。石蓋の隙間は丁寧な粘土目張りの痕跡が認められた。土坑の頭部側と右側面には板石が立てられており、右側面の板石と接して直交するように4枚の板石が墓坑の床面に敷かれていた。板石は左側面には認められず、床面を精査したがその痕跡が見当たらないことから、板石は左側面には存在していないかったと考えられる。床面の頭位部には赤色顔料の一部が残存し、頭蓋骨の下には径15cmほどの円形小穴がみられた。墓坑の足位部は擾乱が著しく、人骨のほかには副葬品は認められなかった。土坑は長軸が1.5m+a、短軸が0.35m前後、深さが0.3mを測る。本石蓋土坑墓の主軸はN-93°-Eを測る。



第19図 元宮遺跡1次調査遺構配置図 (1/200)

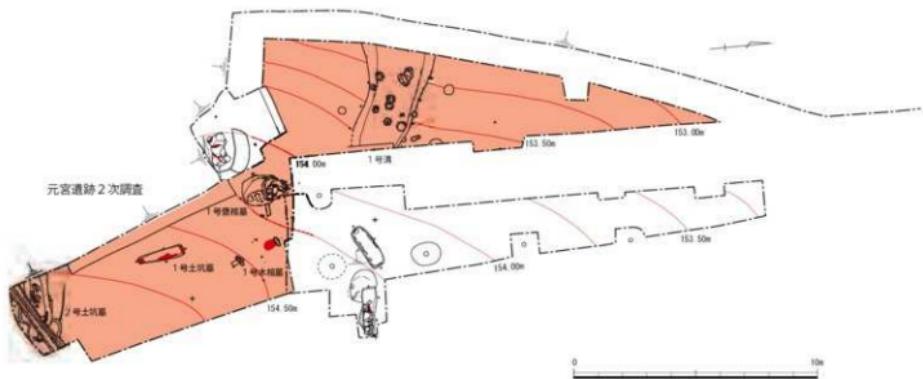


第20図 1号石蓋土坑墓実測図 (1/30)

第5章 元宮遺跡2次の調査

(1) 調査の概要 (第21図)

今回の調査では、石蓋土坑墓が発見された1次調査区域周辺の土取工事予定地約105haを対象に調査を行った。調査の結果、甕棺墓1基、土坑墓2基、木棺墓1基、溝1条が発見された。



第21図 元宮遺跡2次調査遺構配置図 (1/200)

(2) 遺構・遺物について

1号甕棺墓 (第22図、図版12)

1次調査区で見つかった1号石蓋土坑墓のすぐ東側で検出された甕棺墓である。掘り方は方形で長軸1.5m、短軸1.24mを測る。30cm程度掘り下げた所でテラスを設け、そこから斜めに45度の角度で彫り込み甕棺を挿入していた。甕棺には安山岩の扁平な石を使って蓋石とし、白色粘土で丁寧に目張りしていた。甕棺は底部付近で一部に亀裂が入っていたもののほぼ完全な形で残っており、内部からは赤色顔料が施された人骨が一体出土した。副葬品等はなかった。

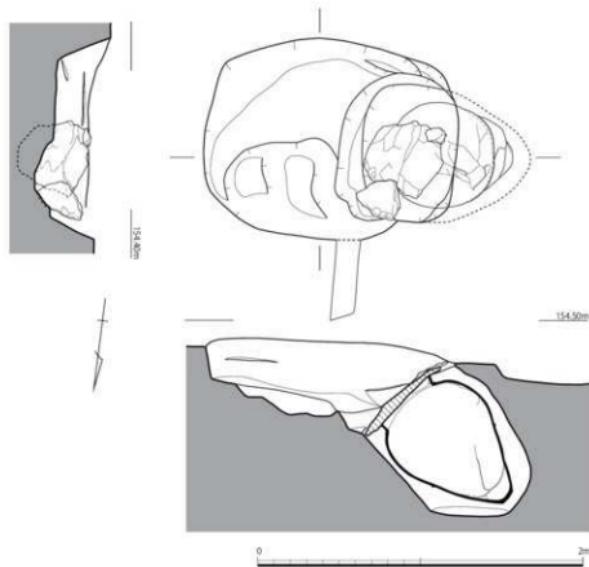
なお、調査では九州大学田中良之先生及び金宰賢先生に来ていただき人骨の出土状況図面等を記録していただいたが担当者の不始末により紛失してしまったため図示することができなかった。不手際をお詫びいたします。

1号甕棺 (第23図、図版12)

口径40cm、底径10cm、器高87cmを測る。口縁部は「く」の字に大きく外反し、頸部に一条の断面三角の突帯を付している。最大径は胸部中位より上にとり、全体的にやや肩が張る形となっている。胸部中位よりやや下には断面三角形の突帯が一条付されている。底部は平底を呈し、底部から胸部にかけては膨らんでおり、レンズ底を意識したようなつくりとなっている。外面刷毛、内面ヘラによる調整が施されている。

出土遺物 (第28図)

1は甕の口縁部片で、跳ね上げ状を呈している。2は甕の口縁部片である。



第22図 1号櫛棺墓実測図 (1/30)

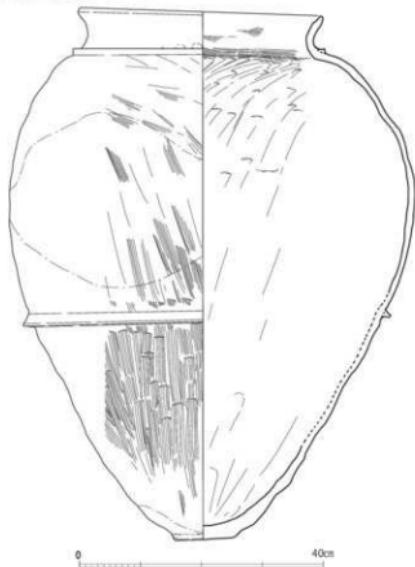
1号木棺墓(第24図、図版13)

1号櫛棺墓の東側で検出された。ほとんどが削平を受けていたが、主軸方向に木棺または石材を立てていたと考えられる掘り方と床面に一部赤色顔料がかろうじて残っていたことから木棺墓と想定した。主軸を南北方向にとり、掘り方間の距離は1.55mを測る。出土遺物はなかった。

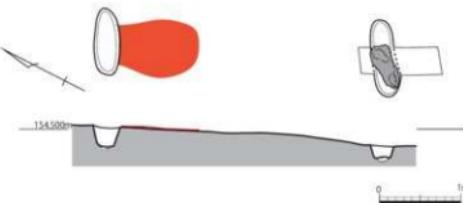
1号土坑墓(第25図、図版13)

1号櫛棺墓と2号土坑墓の間で検出された土坑墓である。主軸を南北方向にとり、北側がやや広くなっている。長軸1.92m、短軸は最大で0.47m、深さ0.25mを測る。床面には広く赤色顔料が分布していた。出土遺物はなかった。

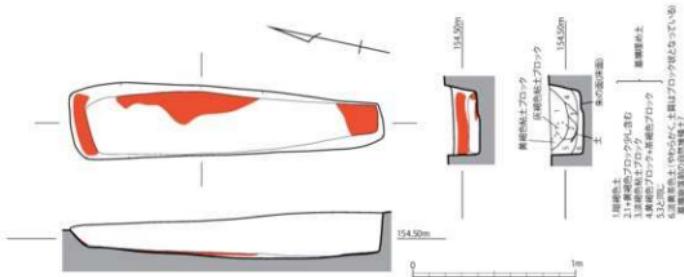
棺材はすでに残っておらず、抜き取り痕と一部安山岩と見られる石材の一部が部分的に残されていた。墓壙の掘り方は長軸1.86m、短軸0.67mを測り、主軸を東西方向に向けている。出土遺物はなかった。



第23図 1号櫛棺墓実測図 (1/8)



第24図 1号木棺墓実測図 (1/30)



第25図 1号土坑墓実測図 (1/30)

2号土坑墓(第26図、図版13)

調査区南端で検出された。遺構の東側から南側にかけての一部を排水管掘削のために削平されていた。平成12年度埋蔵文化財年報には木棺墓としていたが、土坑墓として取り扱うことにする。主軸を東西方向にとり、残存長2.10m、幅0.97m、深さ0.5mを測る。中からは棺材に利用されたと考えられる安山岩の石材の一部と土器片が出土した。

出土遺物(第28図)

3は壺の脚部片である。断面三角形の突帯を貼り付けている。4は甕底部片である。底部はほぼ平坦である。

1号溝(第27図、図版13)

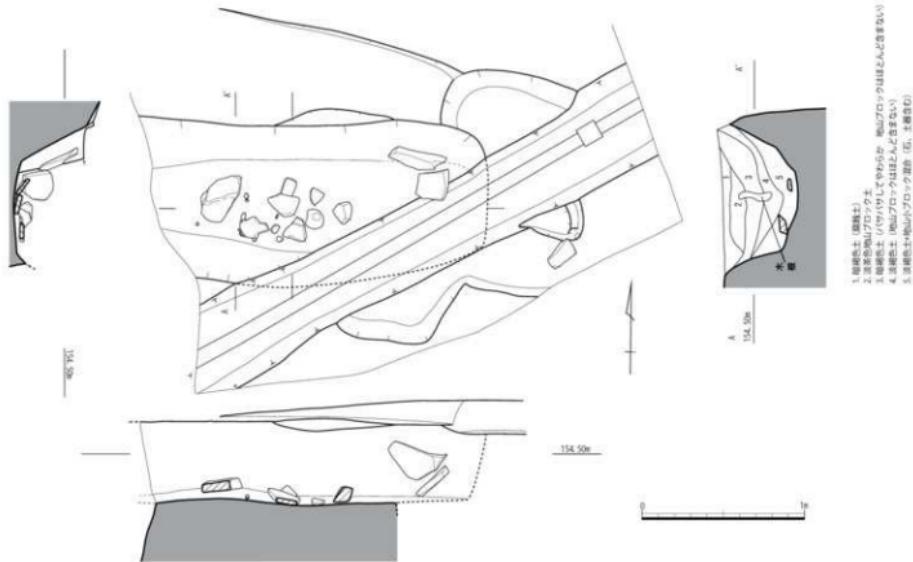
東西方向に延びる浅い溝である。溝の断面は「U」字形を呈し、西に向かって深くなっている。溝の最大幅は3.1m、深さは東端で10cm、西端で15cmを測り、西に向かって低くなっている。

出土遺物(第28図)

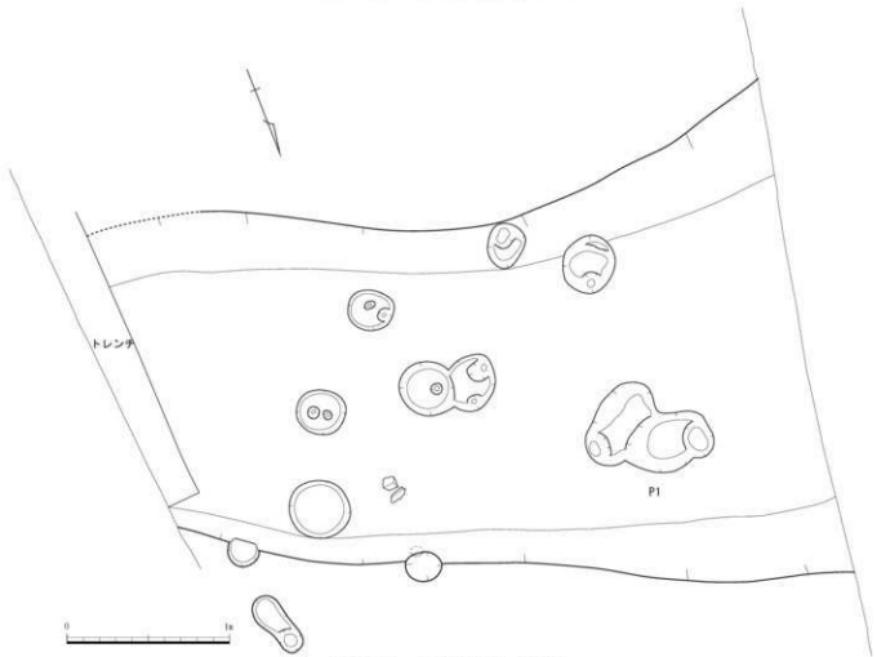
5は壺または器台の口縁部である。6は溝とP1から出土した高环片であり、精製された胎土や形から古墳時代後期の所産と考えられる。

調査区内出土遺物(第28図)

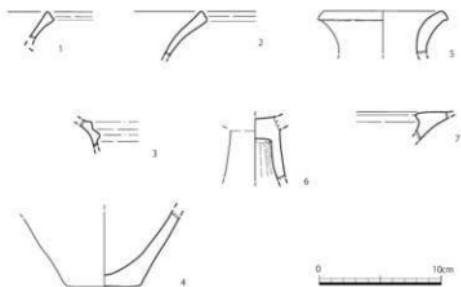
7は鋪先状を呈する高环の口縁部片である。



第26図 2号土坑墓実測図 (1/30)



第27図 1号溝実測図 (1/30)



第28図 出土土器実測図 (1/4)

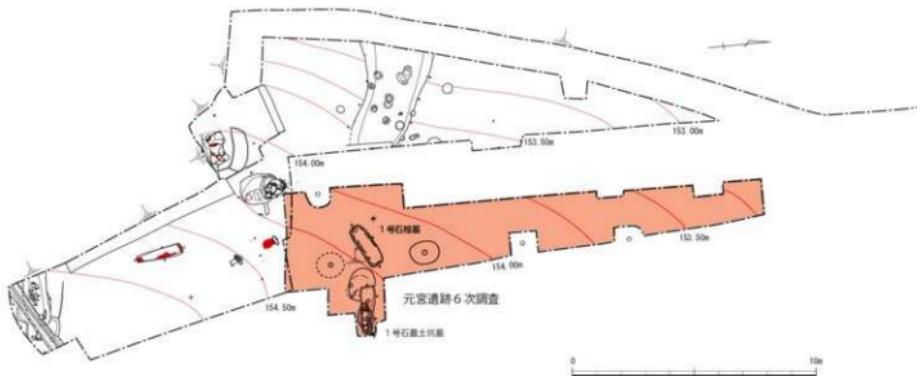


写真2 元宮遺跡2次 1号壺棺墓実測の様子 (田中先生)

第6章 元宮遺跡6次の調査

(1) 調査の概要 (第29図)

1・2次調査区で出土した1号石蓋土坑墓と1号石棺墓の並びの延長上に石棺墓と石蓋土坑墓がそれぞれ1基づつ発見された。

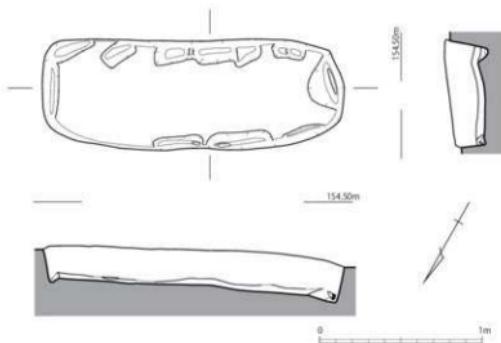


第29図 元宮遺跡6次調査遺構配置図 (1/200)

(2) 遺構・遺物について

1号石棺墓 (第30図、図版14)

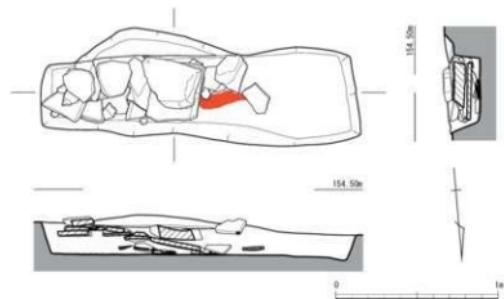
調査区南端 (1・2・6次調査区全体ではほぼ中央に位置する) で検出された石棺墓である。棺材はすでに残っておらず、抜き取り痕と一部安山岩と見られる石材の一部が部分的に残されていた。墓壙の掘り方は長軸1.86m、短軸0.67mを測り、主軸を東西方向に向いている。出土遺物はなかった。



第30図 1号石棺墓実測図 (1/30)

1号石蓋土坑墓(第31図、図版14)

1号石棺墓の東側で検出された石蓋土坑墓である。墓坑の東側半分からは安山岩製の扁平な蓋石が出土した。蓋石は棺底より浮いた状態で並んでおり、埋められた後に外から土砂が流入する過程で蓋石も棺内に流れ込んだものと考えられる。墓坑の掘り方は長軸1.95m、短軸0.60mを測り、主軸を東西方向に向け、西側がやや広くなっている。棺底中央には赤色顔料が残されていた。棺内からの出土遺物はなかった。



第31図 1号石蓋土坑墓実測図(1/30)

第2表 元宮遺跡出土器観察表

揮団番号	遺構名	種別	器種	法量(cm)			色調	胎土		備考
				口径	底径	器高		1 石英2 長石3 角閃石4 雲母5 赤色粒		
第23図	1号甕棺墓	弥生土器	甕	40	10	87	淡褐色	1・2・3・5		
第28図1	1号甕棺墓	弥生土器	甕	—	—	—	淡黃褐色	1・2・3		
第28図2	1号甕棺墓	弥生土器	甕	—	—	—	淡茶褐色	1・2・3・5		
第28図3	2号土坑墓	弥生土器	甕	—	—	—	淡黃褐色	1・2・3・5		
第28図4	2号土坑墓	弥生土器	甕	—	6.1	—	暗褐色	1・2・3		
第28図5	1号溝	弥生土器	壺又は器台	(10.6)	—	—	暗茶褐色	1・2・3・5		
第28図6	1号溝	土師器	高环	—	—	—	燈褐色	1・2・4		
第28図7	表探	弥生土器	高环	—	—	—	淡褐色	1・2・3・5		

第7章 赤迫遺跡G区出土人骨について

早川和賀子¹・米元史織¹・谷澤並里¹・舟橋京子²・田中良之³

1：九州大学大学院比較社会文化学府

2：九州大学総合研究博物館・九州大学アジア埋蔵文化財研究センター

3：九州大学大学院比較社会文化学研究科・九州大学アジア埋蔵文化財研究センター

はじめに

日田市赤迫遺跡G区調査において、古墳時代の土坑墓が多数検出され、人骨が多数出土した。日田市教育委員会から九州大学比較社会文化学研究科基層構造講座に人骨調査の依頼があり、同講座の石井博司・辻田淳一郎が調査・取り上げを行った。出土した人骨は、同教育委員会から九州大学大学院比較社会文化学研究科基層構造講座に搬送され、本講座および平成25年度に新設された九州大学アジア埋蔵文化財研究センターにおいて整理・分析を行った。以下にその結果を報告する。なお、人骨は現在、九州大学大学院比較社会文化学研究科基層構造講座の古人骨・考古資料収蔵室に保管されている。

分析にあたって、人骨の年齢推定は、柄原(1957)とUbelaker(1989)の方法を用いた。性判定はBuikstra and Ubelaker(1994)の方法を用いた。年齢の表記に関しては九州大学医学部解剖学第二講座編集の『日本民族・文化の生成2』(1988)記載の年齢区分に従い、幼児(1-6歳)、小児(6-12歳)、若年(12-20歳)、成年(20-40歳)、老年(40-60歳)、老年(60歳-)とする。

人骨出土状況

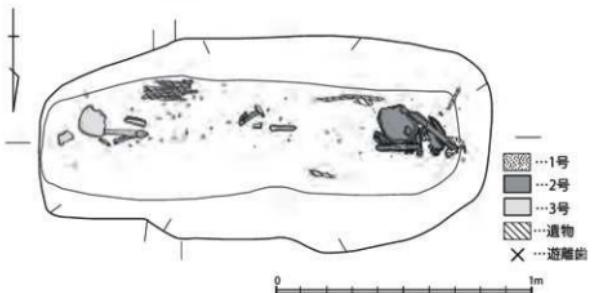
《1号墓》

隅丸長方形の1号墓からは複数体分の人骨が出土している。人骨の分布をみると墓坑の中央部にわずかに骨片があり、それ以外の人骨は東西にわかつて出土している。墓坑中央部から出土する人骨のうちや大きな骨片は、長軸をほぼ東西にむけた状態で出土している。この骨片は墓坑中央部から出土していること、墓坑内では相対的に高いレベルから出土することから、いずれかの被葬者を片づける際に墓坑中央に残された、あるいは、最終終葬個体の可能性が考えられるが、遺存状態が悪く骨片の詳細な同定ができないため、帰属個体を確定することはできない。一方、東西にわかつて出土する人骨のうち、墓坑の西側からは2体分の人骨が重なった状態で出土している。下層から出土している人骨を1号人骨、1号人骨の上にのっているものを2号人骨とする。

墓坑の東側からも人骨が1体出土しており、これを3号人骨とする。いずれも解剖学的に正しい位置関係を保つておらず、これらの人骨はすべて埋葬後二次的に移動されたものと考えられる。

1号人骨は、頭蓋骨が墓坑の最も西側に位置し、顔面を北西に後頭骨を南東に向かた状態で出土している。頭蓋骨のやや東側から下顎骨片が近心側を東に向けた状態で出土している。下顎骨の南側、ほぼ同じレベルから右腰骨が遠位を東に向けた状態で出土している。さらに下顎骨と腰骨の下から長骨片が出土している。1号人骨は解剖学的に正しい位置を保つておらず、二次的に動かされたものと考えられる。

2号人骨は、頭蓋骨が1号人骨の頭蓋骨よりもやや東側に位置し、顔面を南東に後頭骨を北西に向かた状態で出土している。頭蓋骨の西側から下顎骨がオトガイを西に向けた状態で出土している。左右下肢骨は、大腿骨が上にのった状態で、長軸は北西-南東方向に、遠位を南東に向かた状態で出土している。遺存している右上肢骨は長軸を南北方向に、右上腕骨は遠位を北に、右尺骨と右桡骨は遠位を南に向かた状態で出土している。2号人骨は、上肢骨と下肢骨それぞれの長軸方向がそろった状態で出土しているが、解剖学的正位を保つておらず、墓



第32図 1号墓人骨出土状況

坑西側に二次的に動かされたと考えられる。なお、四肢骨の間から遊離歯が出土している。

3号人骨は、頭蓋骨が墓坑内の東側に位置し、顔面を東に後頭骨を西に向けた状態で出土している。下肢骨の長軸は東西方向にそろえ、近位を西側に向いている。しかし、右脛骨が左脛骨の上にのっており、頭蓋骨と右脛骨が近接して出土していることから、3号人骨も解剖学的正位を保っておらず、墓坑東側に二次的に動かされたと考えられる。なお、頭蓋骨や四肢骨の間から遊離歯が出土している。

この他、四肢骨や頭蓋骨は遺存していないが、数多くの遊離歯が墓坑内全体から出土している。詳細な個体識別は出来なかったが、少なくとも5体分の遊離歯が確認される。

少なくとも四肢骨が遺存していると考えられる3体は、すべて解剖学的正位を保っておらず、二次的に動かされた状態である。2号人骨が1号人骨の上にのった状態であることから、西側の2体の人骨は、1号を片付けた後に2号を1号の上に片付けたと言えよう。2号・3号人骨周辺にそれぞれの個体のものと考えられる遊離歯が存在するが、1号人骨も含めて、各個体の頭蓋骨周辺以外には歯牙の分布がみられないことから、これらの人骨は二次的に動かされてはいるが、本来埋葬された頭位方向を保っていると考えられる。したがって、1・2号人骨の頭位は西、3号人骨の頭位は東であったと考えられる。また、狹隘な石棺等で頭位を互い違いに埋葬する例が多くみられ、本埋葬に関しても西側に2体連続して埋葬を行ったと考えよりも、頭位を互い違いにして埋葬したと考える方が自然である。したがって、まず1号あるいは2号人骨が頭位を西に向けた状態で埋葬され、その後、3号人骨が頭位を東に向けた状態で埋葬が行われたものと考えられる。さらにその後に再び頭位を西に向けた状態でもう1体が埋葬されたと考えられる。2号・3号人骨周辺にそれぞれの個体のものと考えられる遊離歯が存在することから、他の墓から改葬された可能性は低く、この墓坑内で片付けが行われたものと考えられる。墓坑内で行われた片付けは、1号を片付けた後に2号を1号の上に片付け、さらに、それぞれの頭位の方向にまとめるように四肢骨を片付けたものと考えられる。また、この3体以外のものと考えられる遊離歯の存在から、少なくとも5体が埋葬されたと考えられるが、人骨の保存状態が良好ではないため、埋葬の前後関係は不明である。墓坑中央部から出土している骨片に関しては、これらのいずれかの被葬者を片づける際に墓坑中央に残された、あるいは、最終埋葬個体の両方の可能性が考えられる。しかし、頭蓋骨が遺存している3体は全て片付けが行われており、片付けられていない頭蓋骨が遺存していないことを考慮すると、この骨片が最終埋葬個体である可能性は低い。そのため、いずれかの被葬者を片づける際に墓壙中央部に残された人骨である可能性の方が高いと考えられる。しかし、遺存状態が良好ではなく部位を同定することができないため、この骨片がどの個体に帰属するかは確定できない。

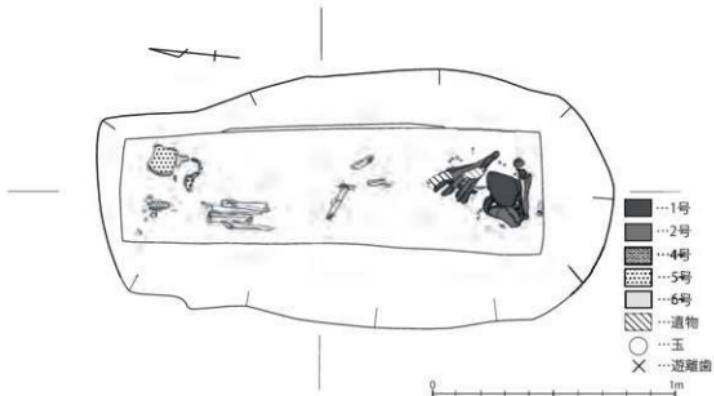
墓坑の西側からは刀子が2点みられ、西南隅からは長軸を北東—南西方向に向けた1点、北壁沿いからは長軸を東西方向に向けた1点が出土している。墓坑の西側、東側それぞれからは、鉄鎌が長軸を東西方向に向けてまとまって出土している。これらはいずれの個体に帰属するかは不明である。

『2号墓』

隅丸長方形の石蓋土坑墓の床面にベンガラ層が存在し、その中から複数体分の人骨が出土している。墓坑の中央部に長管骨片があり、その他は南北にわかれて出土している。墓坑の南側では、2体分の人骨が重なった状態で出土している。頭蓋骨・下頸骨・上肢骨・下肢骨がまとまって出土しており、より下層から出土している熟年女性の人骨を1号人骨、1号人骨にのった状態で出土している若年の人骨を2号人骨とする。またその他に乳歯も遺存しており、これを3号人骨とする。一方、墓坑の北側では、下頸骨が3体分出土しており、西から順に成年・熟年・成年である。これらを4号人骨、5号人骨、6号人骨とする。また、4~6号人骨の南から帰属不明の四肢骨が出土しており、これを不明四肢骨①、墓坑の中央部からは帰属不明の右大腿骨を含む長管骨片が出土しており、これを不明四肢骨②とする。

1号人骨は、頭蓋骨が墓坑の南側に位置し、顔面を北西に向けた状態で右側頭骨を南西に向けて出土している。頭蓋骨の北西からは、下頸骨片がオトガイを北に向けて出土している。下頸骨周辺からは上頸の遊離歯が出土している。上肢骨は、頭蓋骨の北側と南側からわかれて出土している。北側からは、右上腕骨が長軸を北東~南西方向に、近位を北東に向けて出土している。頭蓋骨の南側では、ベンガラ層上に崩落した目張り粘土と思われる黄白土上から左尺骨が長軸を東西方向に、近位を西に向けて出土している。下肢骨は、右上腕骨の上から左右脛骨が長軸を北西~南東方向に、近位を北西に向けて出土している。また、頭蓋骨の南東から右寛骨片が出土している。

2号人骨は、頭蓋骨が1号人骨の西側から、顔面を西に向かって出土している。下頸骨は1号人骨の右寛骨片の東から内側を上に向けた状態で出土している。墓坑南側の頭蓋骨・下頸骨周辺からは上下顎の遊離歯が出土している。但し、右上頸の第2・3大臼歯のみ墓坑の北西隅付近から出土し、その位置は後述する4~6号人骨よりも下位の床面直上である。上肢骨は、1号人骨の左尺骨の上からまとめて出土している。左上腕骨が長軸を東西方向に、近位を西に向けて出土しており、左桡骨が長軸をおおむね北東~南西方向に、近位を南西に向けて出土している。下肢骨は、左右大腿骨・左右脛骨・左腓骨が1号人骨の左右脛骨の上から、長軸を北西~南東方向に、近位を北西に向かって出土している。左大腿骨のみ、他の下肢骨と近位方向を逆にした状態で出土している。以上のように本個体は頭蓋骨および上半身を南側に、下肢をその北側にそれぞれまとめて片付けている。



第33図 2号墓人骨出土状況

3号人骨は、墓坑南側で遊離した歯牙のみが遺存している。3号人骨の歯牙は、その多くが1号・2号人骨の下から出土しているが、一部は1号人骨と同じレベルから出土しており、墓坑内の南側で散乱した状態である。墓坑北側では、4号人骨、5号人骨、6号人骨と、不明四肢骨①が出土している。

4号人骨は、墓坑北西側に位置し、下顎骨が外側を上に、下顎側を北に向けて出土している。下顎骨の周辺からは上下顎の遊離歯が出土しているが、右上顎の第2大臼歯と左下顎の第2小白歯のみが墓坑の南側で出土している。この右上顎の第2大臼歯は、2号人骨とほぼ同じレベルから出土している。

4号人骨の下顎骨の南東から、5号人骨の下顎骨が内側を上に向けて出土している。下顎骨の北東に頸蓋骨が遺存している。頸蓋骨・下顎骨の周辺からは上下顎の遊離歯も出土している。

5号人骨の下顎の東側からは、5号人骨にのった状態で6号人骨の下顎骨がオトガイを南に、咬合面を上に向けて出土している。周囲からは上下顎の遊離歯が出土している。

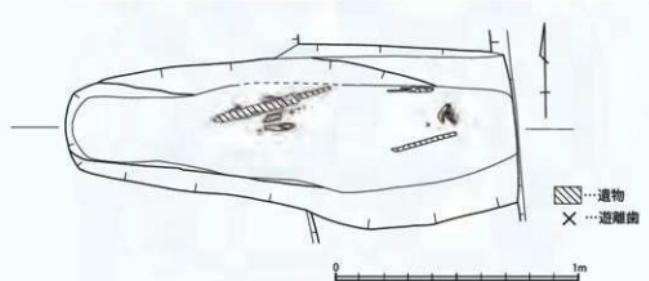
また、4-6号人骨の南側からは、西壁沿いに帰属不明の不明四肢骨①とした右上腕骨、左右大腿骨、左右脛骨、左腓骨が長軸を南北方向に、近位を北に向けてまとめて出土している。

墓坑の中央部からは、帰属不明の不明四肢骨②とした右大腿骨を含む長管骨片が出土している。不明長管骨が長軸をほぼ南北にした状態で出土しており、大腿骨は長軸を北西-南東方向に向けた状態で出土している。

出土している人骨は、解剖的に正しい位置関係を保っていない個体が多い。不明四肢骨②とした個体に関しては、墓坑の中央付近から出土することから最終埋葬個体の可能性が残されるが、遺存状態が良好ではなく長管骨片の同定ができないことや、墓坑内北側最上位から出土している6号人骨より下のレベルで出土していることを勘案すると、最終埋葬個体と断定はできない。1号・3号・5号・6号人骨は、周辺にそれぞれの個体と考えられる遊離歯が存在しており、本来埋葬された頭位方向は保っていると考えられる。2号人骨は大半の部位が墓坑内南側から出土しているものの、上顎第2・3大臼歯が墓坑内北西隅の4-6号人骨より下位の床面直上から出土している。以上の出土状況から、2号人骨は本来頭位北側で埋葬され、その後片付け時に足元方向の墓坑南側へ動かされたと推定される。そして、その際2号人骨はかなり骨化が進んでいたため、歯牙が一部脱落し墓坑北側に残存した可能性が考えられる。墓坑南側では、頭蓋・上下肢骨が1号人骨に2号人骨がのった状態であり、1号人骨を片付けた後に2号人骨を1号人骨の上に片付けたと言えよう。一方、4号人骨は頭蓋の周囲から遊離歯が出土しており、墓坑内北側で二次的に動かされた可能性も考えられるが、本来の頭位を保って北側頭位で埋葬されたと考えられる。4号人骨の上顎第2大臼歯の1点のみが、墓坑南側の2号人骨付近で、2号人骨とおおよそ同じレベルから出土しているが、2号人骨が本来北側頭位で埋葬された後に南側へ片付けられたことを考えると、この上顎第2大臼歯は、2号人骨が南へ動かされた際に付随して動かされた可能性が考えられる。5号人骨の上には6号人骨がのっている状態であり、先述したように、本来埋葬された頭位方向は保たれていると考えられることから、5号人骨→6号人骨の順に埋葬されたと推定される。

したがって、本石蓋土坑墓から出土している人骨は、人骨埋葬の詳細な前後関係は不明であるが、1号・3号人骨が頭位を南に、2号人骨が頭位を北に埋葬され、その後4・5・6号人骨が頭位を北にして埋葬されたと考えられる。その後、どの段階かは不明であるが、1号・2号・3号・4号人骨ともにかなり骨化が進んだ段階で1号人骨は頭蓋付近である墓坑南側へ片付けられ、2号人骨は墓坑の南側へ上肢・頭蓋および下肢骨をそれぞれまとめる様にして片付けられたと推定される。2号・4号人骨の歯牙の一部が移動していること、他の人骨に間しても周辺に遊離歯が出土していることから、他の墓から改葬された可能性は低く、墓坑内で片付けが行われたものと考えられる。人骨の保存状態が良好ではないため、各個体間の埋葬の時間的前後関係は不明である。

また、墓坑南側からは小玉が散乱した状態で出土している。



第3.4図 4号土坑墓人骨出土状況

『4号墓』

隅丸長方形の墓坑底でベンガラが層をなし、その中から1体分の人骨が出土している。墓坑の東側で上下顎骨、中央部の西寄りで左右大脛骨を含む長管骨片が出土している。墓坑の東側では歯牙が出土しており、上下顎骨はその下から出土している。墓坑中央部の西寄りでは、左右大脛骨骨体が長軸を東西方向にそろえて、並列して出土している。人骨の保存状態が良好ではないが、以上の出土状況から、頭位を東に向かって仰展葬の可能性が考えられる。上記の1体以外に、サブトレンドチから右上顎第2小白歯が出土している。

また、墓坑内の東側と、中央部や西寄りの長管骨片の北側それぞれから、鉄剣が長軸を東西方向に向けて出土している。墓坑の東側からは、刀子1点と鉄鎌3点が出土している。

『6号墓』

隅丸長方形の墓坑の北側から、歯牙のみがまとまった状態で出土している。保存状態が良好ではないため、本来埋葬された頭位や片付けの有無などは不明である。

墓坑の西側からは、鉄刀が長軸を南北方向に向けて出土している。

人骨所見

『1号墓』

【1号人骨】

〈保存状態〉

人骨の保存状態は良好ではなく、頭蓋は後頭骨の一部及び右頭頂骨の一部、右側頭骨、右上顎骨の一部及び右下顎骨の一部が遺存している。遊離歯を含めた歯式は以下の通りである。

(○)歯槽開放 ×歯槽閉鎖 /欠損 △歯根のみ • 遊離歯 (○)未萌出)

歯牙咬耗度は、柄原の2nd a ~ bである。

四肢骨は、左右不明様骨片、左脛骨骨体及び右腓骨の近位骨体の一部が遺存している。

	M ²	M ¹	P ²	P ¹	C	/	/	/	/	/	/	/	/	/	/
M ₃	M ₂	M ₁	P ₂	P ₁	△	/	/	/	/	/	/	/	/	/	/

〈年齢と性別〉

年齢は歯牙咬耗度から熟年と推定される。性別は、目安ではあるが脛骨の骨体の周径が84mmを測り、古墳時代の男性の脛骨の骨体周が平均80.9mmであることから(城, 1938)、男性の可能性が高いと考えられる。

〈特記事項〉

すべての部位に齧歯類の噛み跡がある。

【2号人骨】

〈保存状態〉

人骨の保存状態はあまり良好ではない。頭蓋は左頭頂骨・左側頭骨と前頭骨・後頭骨の一部が遺存している。矢状縫合は外板の閉鎖が一部始まっているが内板は開離している。冠状縫合及びラムダ縫合の外板はすべて開離しているが、ラムダ縫合の内板は一部閉鎖している。

下頸骨は右下頸枝以外が遺存している。遊離歯を含めた残存歯牙の歯式は以下の通りである。

		●																	●
/	/	M ¹	/	/	/	/	/	/	/	/	/	/	/	/	/	/	/	M ³	
M ₃	M ₂	M ₁	P ₂	P ₁	C	○	○	○	○	○	○	○	P ₁	P ₂	M ₁	M ₂	M ₃		
●			●																

歯牙咬耗度は、柄原の 1° b ~ 2° a である。

上肢骨は右上腕骨骨体・右桡骨骨体及び右尺骨骨体が遺存し、下肢骨は左右大腿骨骨体・左右脛骨骨体及び右腓骨骨体が遺存している。上腕骨の三角筋粗面や大腿骨の粗線は発達している。

〈年齢と性別〉

年齢は歯牙咬耗度から成年後半～老年と推定される。性別は、乳様突起の基部が発達し、上腕骨三角筋粗面や大腿骨粗線が発達することから、男性と判定される。

〈特記事項〉

右大腿骨の骨体近位側に骨折痕がみられる。近位側が外側にやや湾曲した状態で治癒しているが、X線像をみると骨折線が斜めに入っていることから斜骨折もしくは螺旋骨折と考えられる（鳥巣、1940）。また骨折痕中央部に骨増殖がみられる。その他、すべての部位に齧歯類の噛み跡がある。

【3号人骨】

〈保存状態〉

人骨の保存状態は良好ではなく、頭蓋は後頭骨と左右頭頂骨の一部が遺存している。この個体の歯牙と考えら

●	●																	
M ³	/	M ¹	/	/	/	/	/	/	/	/	/	/	/	/	/	/	/	
/	M ₂	/	/	/	/	/	/	/	/	/	/	/	M ₁	M ₂	M ₃			
●													●	●	●			

れる残存歯牙の歯式は以下の通りである。

歯牙咬耗度は、柄原の 1° c ~ 2° b である。

下肢骨は左大腿骨骨体の一部と左右脛骨骨体が遺存している。他の個体と比較すると遺存する四肢骨が華奢な特徴を示す。

〈年齢と性別〉

年齢は歯牙咬耗度から成年後半～老年と推定される。性別は判定可能部位が遺存していないため不明である。

〈特記事項〉

すべての部位に齧歯類の噛み跡がある。

【未成人個体】

1号墓からは上記の成人個体以外にも数多くの歯牙が出土している。これらの多くの歯牙は咬耗がほとんど進んでいないことから、未成人の歯牙と考えられる。未萌出と考えられる歯牙も多く、歯牙のみからの個体識別は困難であった。そのため、歯種同定可能であった残存歯牙の各歯種本数を咬耗度別に以下に示す。咬耗度は橋原(1957)を基準とし、表中の数値は本数を示す。

咬耗度／上顎	M ³	M ²	M ¹	P ²	P ¹	C	I ²	I ¹	I ¹	I ²	C	P ¹	P ²	M ¹	M ²	M ³	
0°		2	2		2	1	1				3	1	2	2	1	2	1
1°b					2											2	
1°c						1											1
不明											1	2					
咬耗度／下顎	M ₃	M ₂	M ₁	P ₂	P ₁	C	I ₂	I ₁	I ₁	I ₂	C	P ₁	P ₂	M ₁	M ₂	M ₃	
0°		3	2	2	1	1	1				2	2	2	2	2	2	
1°b					3											2	
1°c																	
不明		1									2						



残存する乳歯は以下の通りである。

右の第1大臼歯が上下5体分遺存し、そのうち第1大臼歯が未萌出の個体が2体と歯牙咬耗度1°bの個体が2体、1°cの個体が1体確認された。このことから、上記の成人3体の他、幼児個体が2体と小児～若年個体が3体埋葬されていたものと考えられる。

『2号墓』

【1号人骨】

〈保存状態〉

人骨の保存状態はあまり良好ではない。頭蓋は、後頭骨の一部、右側頭骨の一部、左右頭頂骨の一部及び下顎骨の左下頬枝以外の部位が遺存している。遊離歯を含めた残存歯牙の歯式は以下の通りである。

•	•	•												•		
M ³	/	M ¹	/	P ¹	/	/	/	/	/	/	/	/	/	M ³		
/		M ₁	P ₂	P ₁	C	I ₂	I ₁		/	/	C	P ₁	P ₂	M ₁	/	/

歯牙咬耗度は、柄原の2°aである。

四肢骨は、右上腕骨骨体、左尺骨、左右脛骨骨体、左腓骨骨体が遺存している。

〈年齢と性別〉

年齢は、歯牙咬耗度が2°aであることから老年と推定される。性別は、寛骨大坐骨切痕角が大きく、乳様突起の基部が発達しないことから、女性と判定される。

〈特記事項〉

左右脛骨の全面に、齧歯類の咬み跡がある。

【2号人骨】

〈保存状態〉

人骨の保存状態はあまり良好ではない。頭蓋は前頭骨の一部、左頭頂骨の一部、左下顎骨の一部が遺存している。遊離歯も含めた残存歯牙の歯式は以下の通りである。

•	•	•		•										•
M ²	M ¹	P ²	/	/	I ²	/		I ¹	/	P ¹	P ²	M ¹	M ²	/
/	/	P ₂	P ₁	C	/	/		I ₂	/	P ₁	P ₂	M ₁	M ₂	/

上記の他、下顎の切歯片が2点出土している。歯牙咬耗度は、柄原の1°aである。

四肢骨は、左上腕骨骨体、左桡骨骨体、左右大腿骨骨体、左右脛骨骨体、左腓骨骨体が遺存している。

〈年齢と性別〉

年齢は左上顎の第2大臼歯の歯根形成が完了していないことから、若年(12-15歳)と推定される。性別は判定可能部位が遺存していないため不明である。

〈特記事項〉

左上腕骨・左桡骨の全面、右大腿骨の後面に、齧歯類の咬み跡がある。

【3号人骨】

〈保存状態〉

人骨の保存状態は良好ではなく、歯牙のみが遺存している。残存歯牙の歯式は以下の通りである。

•		•												•
(M ¹)	/	/	(C)	/	/			(I ¹)	/	(C)	/	/	(M ¹)	
•	•		•							•	•			
m ²	m ¹	/	i ²	/						m ¹	m ²			
m ₂	m ₁	/	/	/	/					c	/	m ₂		
•	•									•		•		
(M ₁)	/	/	(C)	(I ₂)	(I ₁)			(I ₁)	(I ₂)	/	/	/	(M ₁)	
•			•	•	•			•	•					

歯牙咬耗度は、柄原の0°である。永久歯は全て歯冠形成途中の未萌出歯である。

〈年齢と性別〉

年齢は、中切歯や第1大臼歯が歯冠形成途中であることから、3～4歳の幼児と推定される。性別は判定可能な年齢に達していないため不明である。

【4号人骨】

〈保存状態〉

人骨の保存状態は良好ではなく、右下顎骨の一部のみ遺存している。遊離歯も含めた残存歯牙の歯式は以下の通りである。

•	•	•										•	•					
M ²	M ¹	P ²	/	/	/	/	/	/	/	/		P ¹	P ²	/	/	/	/	
M ₂	M ₁	P ₂	P ₁	C	I ₂	I ₁		I ₁	I ₂	C	P ₁	P ₂	M ₁	M ₂	/			

歯牙咬耗度は、柄原の1°c～2°aである。

〈年齢と性別〉

年齢は歯牙咬耗度より成年後半と推定される。性別は判定可能部位が遺存していないため不明である。

【5号人骨】

〈保存状態〉

人骨の保存状態は良好ではなく、頭蓋骨片と下顎骨の一部のみ遺存している。遊離歯も含めた残存歯牙の歯式は以下の通りである。

•	•	•						•		•	•	•	•	•	•	•	•
/	M ¹	P ²	P ¹	/	/	/	/	I ¹	/	C	P ¹	P ²	M ¹	M ²	M ³		
M ₂	M ₁	P ₂	P ₁	C	I ₂	I ₁		I ₁	I ₂	C	/	/	/	/	/	/	/

歯牙咬耗度は、柄原の2°a～2°bである。

〈年齢と性別〉

年齢は歯牙咬耗度より老年と推定される。性別は判定可能部位が遺存していないため不明である。

【6号人骨】

〈保存状態〉

人骨の保存状態は良好ではなく、下顎骨の左右下顎枝以外の部位のみ遺存している。遊離歯も含めた残存歯牙の歯式は以下の通りである。

•	•	•				•	•	•	•	•	•	•	•	•	•	•	•
M ²	M ¹	/	P ¹	/		I ²	I ¹	I ¹	I ²	C	P ¹	P ²	M ¹	M ²	M ³		
/	M ₁	P ₂	/	/	/	/	/	/	/	C	P ₁	P ₂	M ₁	M ₂	M ₃		

歯牙咬耗度は、柄原の1°b～2°aである。

〈年齢と性別〉

年齢は歯牙咬耗度より成年後半と推定される。性別は判定可能部位が遺存していないため不明である。

【不明四肢骨①】

〈保存状態〉

人骨の保存状態はあまり良好ではなく、右上腕骨骨体、左右大腿骨骨体、左右脛骨骨体、左腓骨骨体が遺存している。

〈年齢と性別〉

年齢・性別判定可能部位が遺存していないため不明である。但し、骨端が遺存していないが極めて細く、未成人もしくは女性の可能性が考えられる。

〈特記事項〉

右上腕骨・右大腿骨・左右脛骨の全面、左大腿骨の背面に齧歯類の噛み跡がある。

【不明四肢骨②】

〈保存状態〉

人骨の保存状態は良好ではなく、右大腿骨の骨体と長管骨片が遺存している。

〈年齢と性別〉

年齢・性別判定可能部位が遺存していないため不明である。

〈特記事項〉

骨体全面に齧歯類の噛み跡がある。

《4号墓》

〈保存状態〉

人骨の保存状態は良好ではなく、頭蓋は上下顎の一部が遺存している。遊離歯を含めた残存歯牙の歯式は以下の通りである。

歯牙咬耗度は、柄原の 2° b である。

•	•	•	•	•	•	•	•	•	•	•	•	•	•	•	•	•	•	•	•
M ²	M ¹	P ²	P ¹	C	I ²	I ¹	P	P	I ²	I ¹	C	P ¹	P ²	M ¹	M ²	M ³			
M ₁	P ₂	P ₁	C	I ₂	I ₁		/	/	C	P ₁	P ₂	M ₁	M ₂	/					
•	•	•	•	•	•				•	•	•	•	•	•	•	•	•	•	•

その他、大腿骨骨体を含む長管骨片が遺存している。

〈年齢と性別〉

年齢は歯牙咬耗度より熟年と推定される。性別は判定可能部位が遺存していないため不明である。

〈特記事項〉

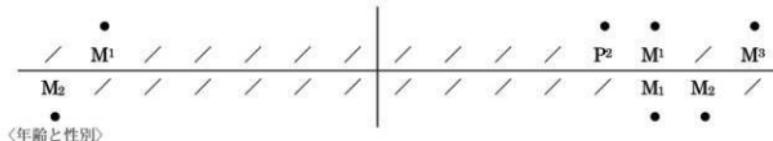
上記個体とは別に、サブトレンチから右上顎第2 小臼歯が出土している。歯牙の咬耗度は、柄原（1957）の 1° a である。

《6号墓》

〈保存状態〉

人骨の保存状態は良好ではなく、歯牙の一部のみが遺存している。残存歯牙の歯式は以下の通りである。

歯牙咬耗度は、柄原の 1° b-2° a である。



〈年齢と性別〉

年齢は歯牙咬耗度より成年後半と推定される。性別は判定可能部位が遺存していないため不明である。

まとめ

以上、出土人骨について報告を行ってきた。本遺跡出土人骨の保存状態は良好ではないため、計測に耐えうる人骨はなく、形態的比較を行える個体は得られなかった。1号・2号墓からは複数体分の人骨が出土しており、4号墓からも保存状態は良好ではないが1体分の人骨が出土している。また4号墓のサブレンチからは別個体の右上顎第2小白歯が1本出土している。6号石蓋土坑墓は人骨の保存状態が良好ではなく、埋葬状態の詳細は不明である。

1号墓からは、成人が3体、未成人が5体、2号墓からは、成人が4体、未成人が2体出土している。いずれも四肢骨が遺存している個体については、すべて解剖学的正位を保っておらず、墓坑内で遊離歯が散在した状態で存在することから、墓坑内で人骨の片付けが行われたと考えられる。どちらも四肢骨や頭蓋に齧歯類の噛み跡が残ることからも、埋葬後しばらくの間は石蓋土坑墓内が埋土で充填されず齧歯類が侵入できる環境であったことが示唆される。いずれも四肢骨は二次的に動かされた状態であり、最終埋葬の個体を特定することはできない。ただし、先述のように、他所から改葬された可能性は低い。大分県内の中尾原遺跡でも、追葬を予定して先行する被葬者を片づけたが、最終的に埋葬を行わなかった事例が指摘されており（中尾原遺跡：末報告）、本例も同様のものと考えられる。このような埋葬例の位置づけについては、今後資料の増加を待って検討したい。

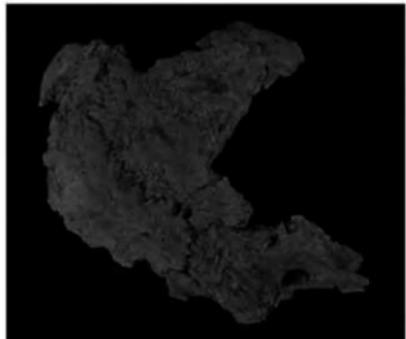
謝辞

赤迫遺跡G区出土人骨を調査・報告するにあたって、日田市教育委員会各位に御世話になった。記して謝意を表したい。

参考文献

- Buikstra J.E. and Ubelaker D.H. (1994) Standards for Data Collection from Human Skeletal Remains. Fayetteville, Arkansas: Arkansas Archaeological Survey Report Number 44.
- 城一郎 (1938) 古墳時代人骨の人類学的研究. 人類学報, 1: 1-172.
- 柄原博 (1957) 日本人歯牙の咬耗に関する研究. 熊本医学会雑誌, 31: 607-656.
- 鳥巢岳彦 (1940) II 大腿 [5] 大腿骨幹部骨折. 天児民和 (編), 神中整形外科学 各論. 南山堂, 914 - 922.
- Ubelaker D.H. (1989) Human Skeletal Remains: Excavation, Analysis, Interpretation (2nd Edition). Washington, D.C.: Taraxacum.

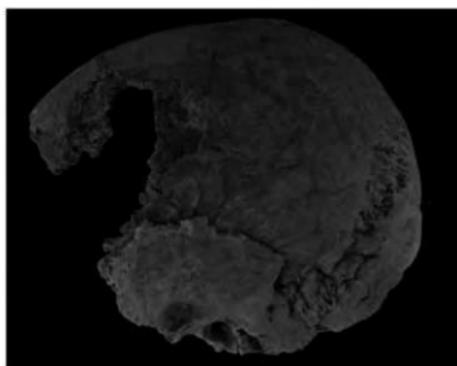
写真図版 1



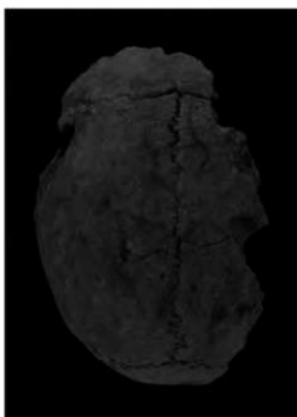
1号墓 - 1号人骨 頭蓋骨



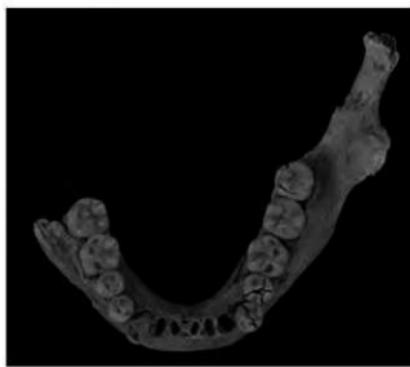
1号墓 - 1号人骨 下顎骨



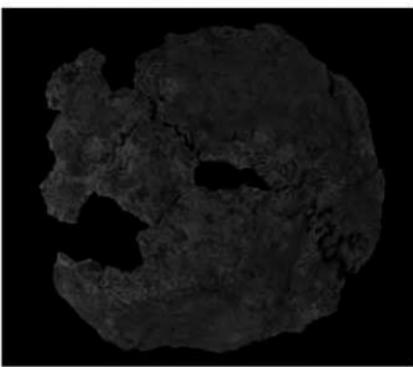
1号墓 - 2号人骨 頭蓋骨 側面



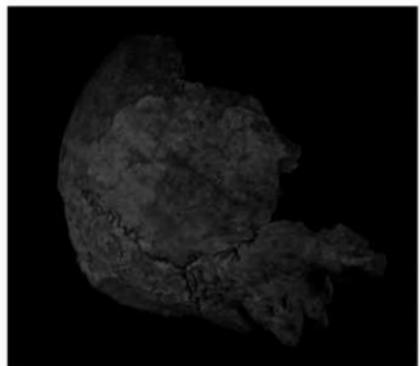
1号墓 - 2号人骨 頭蓋骨 上面



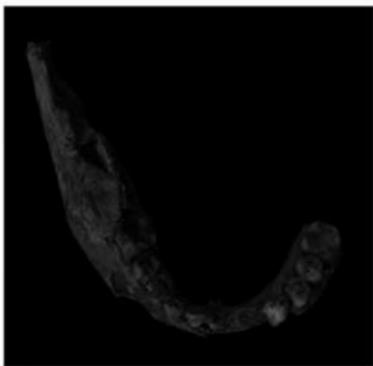
1号墓 - 2号人骨 下顎骨



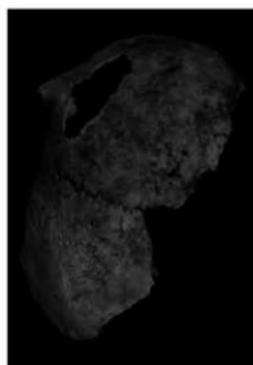
1号墓 - 3号人骨 頭蓋骨



2号墓 - 1号人骨 頭蓋骨



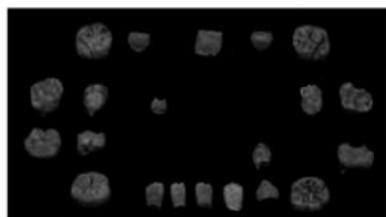
2号墓 - 1号人骨 下顎骨



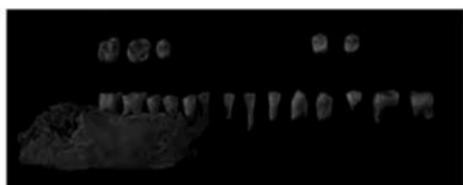
2号墓 - 2号人骨
頭蓋骨 上面



2号墓 - 2号人骨 齒牙

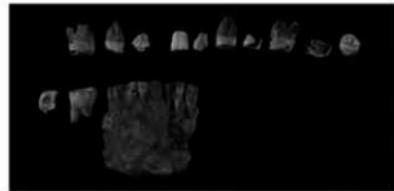


2号墓 - 3号人骨 齒牙



2号墓 - 4号人骨 齒牙

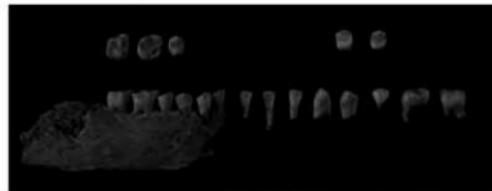
写真図版 3



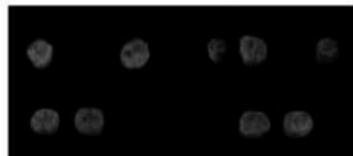
6号墓 - 5号人骨 齒牙



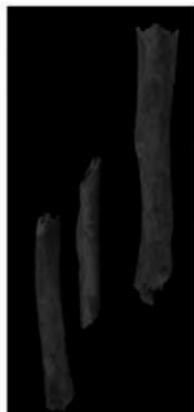
6号墓 - 6号人骨 下頸骨



4号墓 齒牙



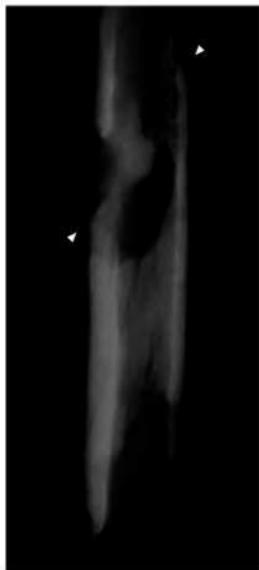
6号墓 齒牙



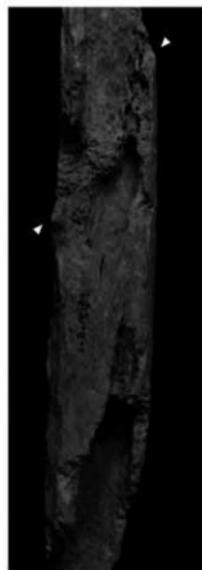
1号墓 - 2号人骨 上肢骨



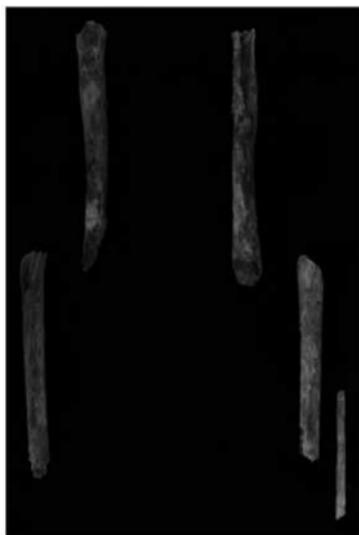
1号墓 - 2号人骨 下肢骨



1号墓 - 2号人骨 大腿骨 骨折



2号墓 - 1号人骨 下腿



2号墓 - 2号人骨 下肢骨



2号墓 - 不明四肢骨

第8章 元宮遺跡出土人骨について

舟橋京子¹・岩崎由季²・米元史織²・田中良之³

1 九州大学総合研究博物館・九州大学アジア埋蔵文化センター

2 九州大学大学院比較社会文化学府基層構造講座

3 九州大学大学院比較社会文化研究院・九州大学アジア埋蔵文化財センター

はじめに

大分県日田市元宮遺跡1次・2次調査において検出された喪棺および石棺から人骨が出土した。調査を担当した日田市教育委員会より九州大学大学院比較社会文化研究院基層構造講座に調査依頼があり、2度にわたり人骨の調査および取り上げを行った。その後人骨は九州大学へと搬入され、本講座および平成25年5月に新設された九州大学アジア埋蔵文化財センターにおいて整理・分析をおこなった。以下にその結果を報告する。なお、人骨は現在九州大学大学院比較社会文化研究院古人骨・考古資料収蔵室に保管されている。

出土状態

『2次調査1号喪棺』

人骨は石棺の胸腔から底部付近にかけて人骨が、喪棺口縁側に頭位をとった仰臥屈葬の状態で出土している。頭蓋を除き全身の骨格がほぼ関節状態で出土している。最も口縁側（東）から左右上肢が肘関節を軽屈した状態で出土している。左右上腕の間からは軀幹骨が、胸椎の途中で若干軸がずれているものの、ほぼ関節した状態で出土している。左右鎖骨は、肩峰端が椎骨側に寄り、胸骨端が頭蓋付近から出土しており、長軸が本来の位置から90度前方に振れ正中側によった状態である。右胸郭下位付近から頭蓋が顎面を下に頭頂部を喪棺底部側にした状態で出土している。最も底部寄りからは東側から左寛骨、仙骨、右寛骨の順に解剖学的正位置を保った状態で、前面をやや北側斜め上にした状態で出土している。上半身から腰部の北西側からは下肢が股関節・膝関節を強屈した状態で出土している。

以上の出土状況から本人骨は口縁側に頭位をとった仰臥屈葬で膝関節が右に倒れた状態で埋葬されていたが、喪棺の傾斜が急であったため、軟部組織の腐朽に伴い頭蓋が腹部付近まで落下したと推定される。

『1次調査1号石蓋土坑』

人骨は石蓋土坑内東側から、頭蓋骨・右上肢・肋骨片が出土している。頭蓋は頭頂部を上にし顎面が北西に向いた状態で出土している。頭蓋の直下および南東側や北東側から肋骨片が出土している。頭蓋の北西側からは右上肢が、上腕骨・桡骨・尺骨の順で長軸を南北にした状態で出土している。上腕は近位を南にし、桡骨・尺骨は近位を北にしており肘関節は関節状態ではない。上肢の25~30cm西側から下肢骨片が出土している。

以上の出土状況から、本人骨は頭位を南東にとった仰臥位の伸展葬にみえるが、肋骨の上から頭蓋が出土しており肘関節も関節状態にないなど片付けの可能性が考えられる。したがって、本来の埋葬姿勢は不明である。

人骨所見

『2次調査1号喪棺出土人骨』

【保存状態】

本人骨の保存状態は良好である。頭蓋骨は左右上顎骨・左頬骨前頭突起付近片・右側頭骨およびラムダ縫合を含む左右頭頂骨片と後頭骨が遺存している。乳様突起・外後頭隆起はあまり発達していない。主要三縫合は、矢

状縫合・ラムダ縫合ともに外板が閉じかけており内板は閉じている。歯牙は歯種不明歯牙が1本のみ出土している。残存している歯槽の閉鎖状況は以下のとおりである。



転幹骨は、第1—第3頸椎・胸椎12点・腰椎5点・仙骨底付近片・右肋骨9点・左肋骨11点が遺存している。

上肢骨は、左右鎖骨・左右肩甲骨片・骨頭を除く左右上腕骨・近位側を除く左右桡骨・肘頭を除く左右尺骨・基節骨・左有鉤骨が遺存している。上腕骨三角筋粗面は発達している。

下肢骨は、腸骨棲を除く左右寛骨・骨頭を除く右大腿骨・左大腿骨・遠位側を除く右脛骨・近位側を除く左脛骨・左右腓骨骨体部・左距骨・左右不明中足骨4点・左右不明基節骨1点が遺存している。大坐骨切痕角・恥骨下角は小さい。大腿骨粗線および脛骨ヒラメ筋線は発達している。

この他にも軟骨が骨化した1cm×2cmほどのごく薄い扁平な骨片が遺存している。

〈性別と年齢〉性別は、乳様突起および外後頭隆起は発達していないものの大坐骨切痕角・恥骨下角が小さく、上腕骨三角筋粗面・大腿骨粗線・脛骨ヒラメ筋線も発達していることから男性と判定される。年齢は、上顎の歯槽閉鎖状況および頭蓋主要三縫合の閉鎖状況、椎骨のリッピングから老年以上と推定される。

【形質的特徴】

本人骨は四肢骨の計測が可能でありその結果を表2に示す。上肢・下肢ともに骨体周径の計測が可能であり、いずれの値においても比較群中もっとも低い値である。したがって、本個体は比較的華奢な四肢であったと言えよう。

【特記事項】

左桡骨遠位部および骨体部に骨折痕が認められる。骨体部は斜骨折の様相が見られ、尺骨には同様な所見が見られない。このような桡骨単独の骨折の要因としては、打撃などによる桡骨への直接外力によるものと転倒・落下時に掌をついたことによる前腕部への介達外力が考えられる。遠位部に関してはX線像で明瞭な骨折線が認められず骨長軸のずれも認められない。加えて骨表面の隆起が認められる。これらの所見を総合すると遠位側から長軸方向に力が加わったことによる竹節骨折と推定される。この骨折も要因としては転倒・落下時に手を突いたことが要因と考えられるが、幼少児の段階で起こる場合が多く(真角1991)、骨体部の骨折とは別要因による可能性が高い。

腰椎にはリッピングが認められ、椎体には圧迫骨折の所見が見られる。X線像でも椎体内部の骨密度が減じている様子が見られる。これらの腰椎の所見は加齢に伴うものであり(辻1993)、軟骨の骨化した破片が出土していることとも併せて上述の年齢を支持するものである。

«1次調査1号石蓋土坑出土人骨»

本人骨の保存状態はあまりよくない。頭蓋は後頭骨および右侧頭骨の乳様突起付近・左侧頭線付近を除いた部分が遺存している。眼窩上隆起は発達しているが乳様突起はあまり発達していない。冠状縫合は外板・内板とともに開いており、矢状縫合は外板は開いており内板はほとんど閉鎖している。ほかにも左右の下頬枝が遺存している。歯牙も一部遺存しており残存歯牙の歯式は以下のとおりである。

○	M ²	M ¹	P ²	P ¹	C	○	○	○	△	P ¹	P ²	○	M ²	/
M ₂	/	/	/	/	/	/	/	/	/	/	/	/	/	/
●														

歯牙咬耗度は柄原の1°c～2°aである（柄原1957）。

上肢は、右上腕骨骨体部および近位側3分の1を除いた桡骨・尺骨が遺存している。上腕骨三角筋粗面はやや発達している。

下肢骨は部位同定困難な小片が遺存している。

【年齢・性別】

年齢は、歯牙咬耗度および頭蓋主縫合の閉鎖状況から成年後半と推定される。性別は、乳様突起はあまり発達していないものの眼窩上隆起が発達しており、三角筋粗面もやや発達していることから男性と判定される。

【形質的特徴】

本人骨の形質的特徴については表1のとおりである。頬骨弓幅141mm、中顎幅108mm、上顎高70.0mmと頬が幅広くやや高い傾向にある。頬骨弓幅は肥後古墳人や津雲繩文人に近い値であり比較群中でも高い値である。中顎幅は比較群中もっとも高い値である。上顎高に関しては、志津里石棺集団・豊後古墳人と同程度の値である。コルマン上顎示数49.6、ウィルヒョウ上顎示数64.8であり、コルマン上顎示数は豊後古墳人の値に近く低上顎に分類され、ウィルヒョウ上顎示数は肥後古墳人の値に近く過低上顎に分類される。眼窓は眼窓幅43mm、眼窓高36mm、眼窓示数は83.7で比較群中もっとも高い傾向を示し中眼窓に分類される。これは元宮石棺人骨の眼窓幅が比較群の中でも中間的な値である筑前・筑後・豊後の古墳人に近いのに対し、眼窓高が比較群中もっとも高い値をとることに起因している。鼻幅は26mm、鼻高は55mmであり、鼻示数は47.3であり中鼻に分類される。鼻示数は比較群中もっとも鼻が狭い傾向を示す。これは、鼻幅が北豊前・肥後古墳人に近く比較群の中でも中間的な値であるのに対し、鼻高が比較群中もっとも高い値をとることに起因する。

本個体をもって元宮跡遺を代表させることはできないが、本個体の特徴は顔が低い一方で眼窓が高く鼻が狭いという特徴を示す。このような特徴は北部九州の弥生・古墳時代人や豊前の古墳時代人と類似しており豊後古墳人とはやや異なる。一方で、顔が低いという点では豊後古墳人と類似している。このような豊後古墳時代人や北部九州の弥生・古墳時代人の形質を併せ持つ特徴は、玖珠町陣ヶ台遺跡（田中・大森1999）・志津里石棺墓（米元他2013）や直入町長湯横穴墓（石川他2004）出土人骨の報告において指摘されている特徴と類似している。したがって、本個体も豊後地域における地域性解明の一助となる資料になろう。

まとめ

以上出土人骨についての記載・報告を行ってきた。本遺跡出土人骨は個体数が少なく元宮跡遺集団として形質的比較を行うことはできなかった。ただし、2次調査1号竪棺出土弥生人骨に関しては四肢が華奢であったという特徴が指摘できた。1次調査1号石蓋土坑出土古墳人骨に関しては、近隣の豊後山間部集団同様に豊後古墳時代人や北部九州の弥生・古墳時代人の形質を併せ持つという特徴が指摘できた。

今後の資料のさらなる増加を待ちたい。

最後に本報告にあたり、日田市教育委員会各位にはご便宜を賜った。深謝したい。

参考文献

- 柄原 博. 1957: 日本人歯牙咬耗度に関する研究. 熊本医学会雑誌. 31-4.
- 辻 開雄. 1993: 脊椎・腰椎. 標準整形外科学. 医学書院.
- 真角昭吾. 1991: 骨損傷. 神中整形外科学. 南山堂.

第3表 主要頸蓋計測項目の平均値比較（男性）

♂	元宮 石棺	志津里		筑前 ¹⁾		筑後 ¹⁾		肥前 ¹⁾		北豊前 ¹⁾			
		(古墳)		(古墳)		(古墳)		(古墳)		(古墳)			
N	M	N	M	N	M	N	M	N	M	N	M		
45	頸骨弓幅	141	4	136.3	3	17	139.4	6	140.3	7	139.4	11	136.9
46	中頸幅	108	4	105.3	21	105.2	9	104.1	9	104.4	18	104.6	
48	上顎高	70	4	70.8	19	72.9	9	72.1	7	72.4	16	72.9	
48/45	上顎示数(Ｋ)	49.6	4	51.9	11	52.1	6	50.7	6	52.0	10	54.0	
48/46	上顎示数(Ｖ)	64.8	4	67.2	16	68.9	9	69.4	7	69.3	16	69.5	
51	眼窩幅(左)	43	4	41.0	16	43.9	8	43.6	6	45.3	17	42.6	
52	眼窩高(左)	36	4	33.0	17	34.9	8	33.5	6	33.8	17	34.2	
52/51(L)	眼窩示数(左)	83.7	4	80.5	15	79.9	8	76.9	6	74.7	17	80.4	
54	鼻幅	26	4	24.8	19	26.5	11	26.7	8	26.8	16	25.9	
55	鼻高	55	4	51.0	19	52.5	10	52.1	9	51.0	16	50.5	
54/55	鼻示数	47.3	4	48.5	19	50.8	10	51.4	8	53.8	15	51.5	

♂	南豊前 ¹⁾		舞後 ¹⁾		肥後 ¹⁾		北部九州 ²⁾		津雲 ³⁾		西日本 ⁴⁾			
	(古墳)		(古墳)		(古墳)		(古墳)		(弥生)		(縄文)		(現代)	
	N	M	N	M	N	M	N	M	N	M	N	M	N	M
45	頸骨弓幅	5	137.8	10	138.5	5	141.4	103	140.0	16	143.8	106	134.5	
46	中頸幅	6	104.7	16	101.8	8	103.6	114	104.7	31	103.6	107	99.9	
48	上顎高	6	71.7	17	69.4	6	66.5	114	74.8	28	65.8	92	71.8	
48/45	上顎示数(Ｋ)	5	51.8	10	49.7	4	47.5	95	53.3	10	45.9	90	53.5	
48/46	上顎示数(Ｖ)	6	68.5	16	68.2	6	64.3	105	71.5	22	64.8	91	71.8	
51	眼窩幅(左)	5	42.4	13	42.8	7	43.6	89	43.2	40	43.5	108	43.0	
52	眼窓高(左)	6	33.8	13	33.0	6	32.2	93	34.5	38	33.8	108	34.4	
52/51(L)	眼窓示数(左)	5	80.1	13	77.1	6	73.1	86	79.9	32	77.4	108	80.2	
54	鼻幅	6	27.0	16	26.8	6	26.3	117	27.1	36	26.9	108	25.9	
55	鼻高	6	51.0	18	49.7	8	49.8	116	52.8	30	49.8	108	52.2	
54/55	鼻示数	6	52.9	16	54.2	6	52.6	113	51.4	27	53.7	108	49.8	

1)九州大学医学部解剖学第二講座 (1987) 2)中橋・永井 (1969) 3)清野・宮本 (1926) , 金高 (1928)

第4表上肢骨の計測値と他集団との比較（男性）

♂	元宮 2次1号腰椎	北部九州 ¹⁾		北部九州 ²⁾		津雲 ³⁾		九州 ⁴⁾				
		R	L	(古墳)	(弥生)	(縄文)	(現代)	N	M			
上腕骨												
1	最大長	-	-	8	304.6	22	302.6	36	284.3	106	295.3	
2	全長	-	-	6	300.7	17	296.8	35	280.6	106	290.6	
5	中央最大径	21	20	21	23.3	76	23.3	59	24.1	106	21.9	
6	中央最小径	14	14	20	17.7	76	17.4	50	17.8	106	16.9	
7	骨体最小周	55	54	37	64.1	81	63.9	50	64.0	106	61.8	
7a	中央周	60	59	21	68.1	75	67.8	50	69.3	106	63.7	
6/5	骨体断面示数	-	-	21	72.3	76	74.9	50	73.9	106	79.1	
7a	長軸示数	-	-	6	21.4	22	21.3	36	22.7	106	20.9	
尺骨												
1	最大長	-	-	2	241.5	12	253.2	19	249.1	62	236.2	
2	橈橈長	-	-	4	223.5	15	224.7	25	219.7	64	209.2	
3	最小周	-	-	34	13	36.8	63	37.4	34	37.7	65	35.8
11	矢状径	-	-	11	24	13.4	100	13.2	50	14.3	63	12.8
12	横径	-	-	16	24	17.4	100	17.6	50	16.3	64	16.5
3/2	長軸示数	-	-	4	17.3	15	16.8	25	17.4	63	17.0	
11/12	骨体断面示数	-	-	68.75	24	77.3	100	75.4	50	88.5	63	74.9

1)九州大学医学部解剖学第二講座 2)中橋・永井 (1969) 3)清野・平井 (1928) 4)専頭 (1967)

溝口 (1957)

第5表下肢骨の計測値と他集団との比較（男性）

♂	元宮 2次1号腰椎	北部九州 ¹⁾		北部九州 ²⁾		津雲 ³⁾		九州 ⁴⁾			
		R	L	(古墳)	(弥生)	(縄文)	(現代)	N	M		
大腿骨											
6	中央矢状径	26	26	79	28.7	162	29.7	47	29.0	59	26.5
7	中央横径	25	26	80	27.6	166	28.0	47	26.0	59	25.6
8	中央周	80	83	74	88.5	161	96.8	47	87.4	59	82.4
9	骨体上横径	30	30	65	32.3	115	32.6	43	30.7	59	29.4
10	骨体上矢状径	25	23	65	25.7	115	26.2	43	25.5	59	24.3
6/7	中央断面示数	104.0	100.0	79	104.6	162	106.4	47	111.8	58	103.8
10/9	上骨体断面示数	83.3	76.7	65	80.1	115	80.5	43	83.1	59	82.8
胫骨											
1	全長	-	-	14	334.9	27	345.6	20	340.0	61	320.3
1a	最大長	-	-	17	340.1	52	350.5	22	343.6	60	326.9
8	中央最大径	26	24	31	29.8	74	32.0	46	32.3	61	27.8
8a	栄養孔位最大径	30	30	54	34.7	153	36.5	38	35.2	60	30.6
9	中央横径	19	18	32	21.8	72	22.9	46	20.4	61	21.1
9n	栄養孔位横径	19	19	54	24.2	153	25.3	38	22.2	61	23.7
10	骨体周	71	67	30	82.0	74	86.5	45	84.5	62	78.4
10a	栄養孔位周	76	77	54	94.3	151	96.9	38	92.8	61	88.9
10b	最小周	62	65	51	75.1	122	78.4	41	76.7	60	71.3
9/8	中央断面示数	73.1	75.0	31	73.5	74	72.2	46	63.3	61	76.1
9a/8a	栄養孔位断面示数	63.3	63.3	54	69.9	152	69.5	38	63.0	60	77.5
10b/1	長厚示数	-	-	14	22.5	26	22.7	20	22.9	60	22.4

1)九州大学医学部解剖学第二講座 2)中橋・永井 (1969) 3)清野・平井 (1928) 4)阿部 (1955) , 講義 (1955)

写真図版5



2次1号墓棺出土上肢



2次1号墓棺出土左桡骨骨折痕
(左:正常個体、中央:骨折個体
右:レ線像)



2次1号墓棺出土下肢骨



2次1号墓棺出土人骨腰椎圧迫骨折
(左:上面観、右:正面観レ線像)

写真図版6



1次1号石蓋土坑出土頭蓋骨(正面観)



1次1号石蓋土坑出土頭蓋骨(上面観)



1次1号石蓋土坑出土頭蓋骨(側面観)



1次1号石蓋土坑出土上肢骨

第9章 総括

(1) 赤迫遺跡G区について

赤迫遺跡G区では6基の墓が確認された。これらの墓は尾根上の最も高い部分を選定して列状に並び、頭位方向が南北軸になるものと東西軸になるものがあるものの、一連の墓と考えられる。また、この墓列の延長上に丸尾神社古墳が存在しており、時期比定の問題もあるが、何らかの関係を窺わせる。

時期については、出土した鉄鏃から、ある程度比定できる。まず、1号墓出土の長頸鏃（第8図1～14、16、17）は、鎌身形態と棘状の笠被を有さないことから、5世紀後半～6世紀前半（古野氏の編年の中期）と考えられる。また、18の短頸鏃は5世紀中頃の特徴を有するか。

4号墓出土の鉄鏃のうち、第15図1は逆刺の形態から5世紀後半～6世紀前半、同図3・4は、やや時期が下がって6世紀中頃に比定できる。

以上、鉄鏃の形態から時期を考えた場合、5世紀前半～6世紀中頃という時期幅が見られるが、主には6世紀前半を中心とした時期になるであろう。その上で、1号墓は8体の人骨が埋葬されており、5世紀中頃から6世紀前半にかけての数回の埋葬があったことや、4号墓は人骨が1体しか確認されなかったものの、6世紀中頃のものがみられることから、追葬も想定しておく必要があると思われる。

また、今回確認された石蓋土坑墓は、日田地方においては銭渦遺跡や元宮遺跡、草場第2遺跡など、複数の遺跡で、古墳時代中期以降のものが確認されている。同様の墓制は筑後川の中・下流域でも見られ、この地域からの影響なのか、また日田地域における在来の墓制であるのか、現時点での判断は難しく、今後の資料の増加に期待したい。

参考文献

- 古野他久「古墳時代武器の編年・北部九州を中心として」『九州考古学』第64号 九州考古学会 1989
水野敏典「空首刀 長持形鉄鏃」北條万隆編『古墳時代の考古学4 創作品の型式と編年』 同文社 2013

(2) 元宮遺跡1・2・6次について

3次に及ぶ元宮遺跡の調査では、144m²の調査区から甕棺墓1基、石棺墓1基、石蓋土坑墓2基、土坑墓2基、石棺墓1基、溝状遺構1条が検出された。このうち、甕棺墓と石蓋土坑墓からは人骨が出土し、1次1号石蓋土坑墓では頭部付近、2次1号甕棺墓では人骨に、2次1号木棺墓には木口側、2次1号土坑墓では床面全体、6次3号土坑墓（石蓋土坑墓）では棺中央部にそれぞれ赤色顔料の塗布が確認されている。時期を確定できる遺構は2次1号甕棺墓のみである。甕棺は口縁部の屈曲が丸みを帯びて短くなり、肩部が張り出した特殊な器形で、体部は肩部から窄まり、底部はレンズ気味の平底を呈している。草場第2遺跡65号墓などに類似しようか。草場遺跡の甕棺の器形変遷^(註1)などを参考にすれば、退化気味の口縁部やレンズ底などから、後期後半の範疇に収まるものの、後半の新段階や終末では至らないやや古い時期のものと考えられる。

隣接する元宮遺跡3次調査でも石蓋土坑墓1基、箱式石棺墓2基、土坑墓3基などの墓が確認されており、1～6次の墳墓総数は13基と少ない。元宮原より一段高くなった調査地周辺の丘陵上に、弥生時代後期後半から古墳時代までの小規模な墳墓群が営まれていたのである。朝日宮ノ原遺跡D区などのように、市内では後期後半代の甕棺墓を契機として古墳時代まで継続する墳墓の造営が知られるが、元宮遺跡でも同様な墳墓形成が測られていてものと考えておきたい。また、近年の発掘調査では、元宮原台地上には集落や古墳の存在など^(註2)が確認されている。墳墓群との関係を窺わせる事例として注目される。

(註1) 高橋徹 1989 「まとめ」『草場第2遺跡』大分県教育委員会

(註2) 平成25年度の試掘調査の成果による。

写真図版 7 (赤迫遺跡G区)



1号墓発掘状況（東より）



1号墓人骨出土状況（北より）



2号墓発掘状況（東より）



2号墓検出状況（南より）



2号墓完掘状況（北より）

写真図版 8 (赤迫遺跡G区)



3号墓石蓋検出状況（南より）



3号墓発掘状況（南より）



6号墓発掘状況（南より）



4号墓発掘状況（北より）



5号墓発掘状況（南より）



人骨調査風景 1



人骨調査風景 2

写真図版9（元宮遺跡1次）



遺構検出状況（北西より）



遺構検出状況（真上より）



人骨出土状況（北西より）



人骨検出状況（真上より）



人骨検出状況（真上より）

写真図版 10 (元宮遺跡 1次)



人骨調査風景



人骨調査風景



頭蓋骨取り上げ後の状況（真上から）



人骨取り上げ後の状況（北西から）



人骨取り上げ後の状況（真上から）

写真図版 11 (元宮遺跡 1 次)



完掘写真（北西より）



人骨取り上げ後の状況（北西より）

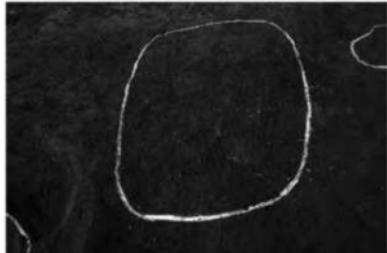


発掘写真（真上より）

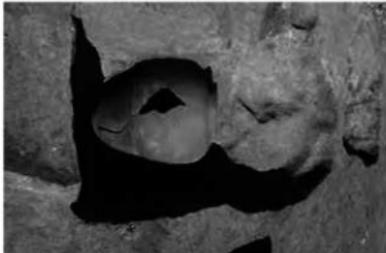


完掘写真（北西より）

写真図版 12 (元宮遺跡 2次)



1号甕棺墓蓋石検出状況



1号甕棺墓甕棺全体



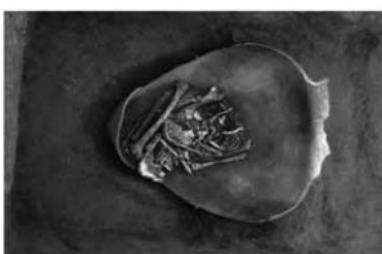
1号甕棺墓蓋石検出状況



1号甕棺墓甕棺埋設状況



1号甕棺墓蓋石検出状況



1号甕棺墓人骨出土状況



1号甕棺墓蓋石除去の様子



1号甕棺墓人骨アップ

写真図版 1 3 (元宮遺跡 2 次)



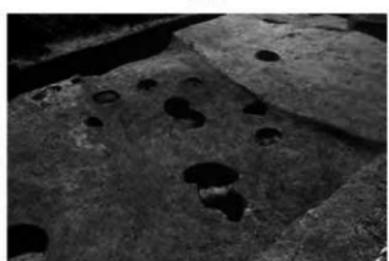
1号甕棺



1号土坑墓土層



1号土坑墓完掘



1号溝（西から）



2号土坑墓遺物出土状況



1号木棺墓完掘

写真図版 14 (元宮遺跡 2・6 次)



2次調査区全景



6次調査区全景



1号石棺墓完掘状況

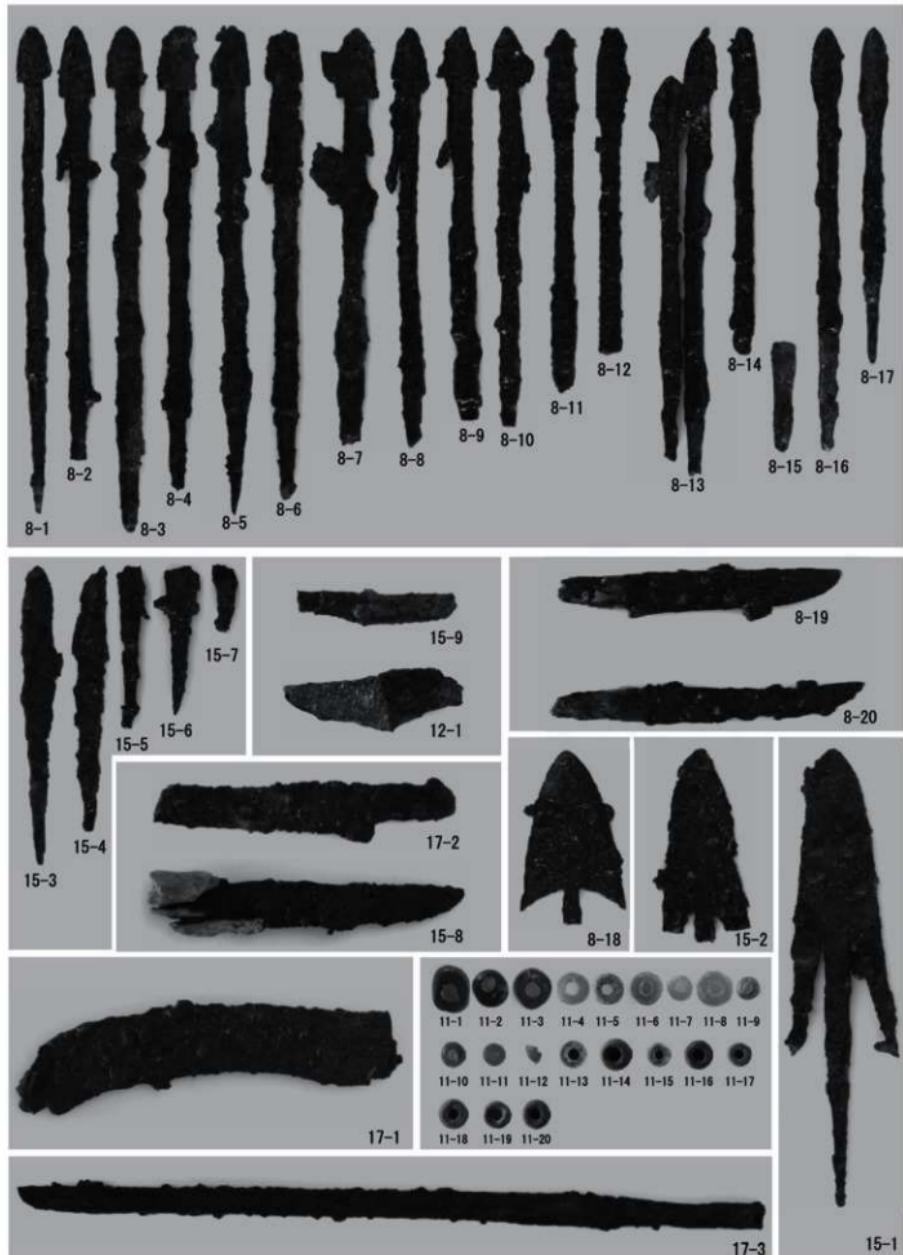


1号石蓋土坑墓 石蓋出土状況

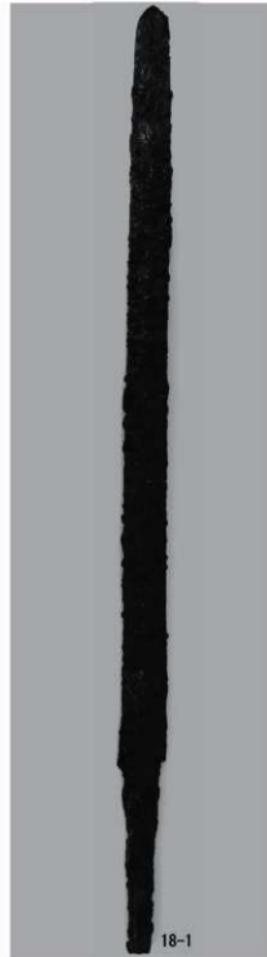


1号石蓋土坑墓完掘状況

写真図版 15 (赤迫遺跡 G 区)



写真図版 16 (赤迫遺跡 G 区)



報告書抄録

ふりがな	あかひこいせきく もとみやいせき1・2・6次							
書名	赤迫遺跡G区 元宮遺跡1・2・6次							
副書名								
巻次								
シリーズ名	日田市埋蔵文化財調査報告書 市内遺跡発掘調査報告書							
シリーズ番号	第114集 第13集							
編著者名	上原耕平 土居和幸 行時志郎 若杉竜太 早川和賀子 米元史織 谷澤亜里 岩橋由季 身櫛京子 田中良之							
編集機関	日田市教育庁文化財保護課							
所在地	〒877-0077 大分県日田市南友田町516-1 0973(24)7171							
発行年月日	2014年(平成26年)3月31日							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村	道路番号	北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
あかひこいせきく 赤迫遺跡G区	大分県日田市 あかひこいせきく 大学北豆田	44204-6	204145	33° 56' 33"	130° 49' 16"	19960325 ~19960628	1,500m ²	風倒木処理
もとみやいせき 元宮遺跡 1・2・6次	大分県日田市 もとみやいせきく 大学求来里	44204-6	204192	33° 57' 32"	130° 48' 48"	1次: 19970714 ~0721 2次: 19980902 ~1001 6次: 20000306	144.2m ² (1次: 9.2m ²) (2次: 105m ²) (6次: 30m ²)	土砂採取
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項			
赤迫遺跡	墓	古墳	石蓋土坑墓4基 土坑墓2基	鉄器(鎌・刀子・鉄劍・鉄刀)				
元宮遺跡 1・2・6次	墓	弥生 古墳	(1次) 石蓋土坑墓1基 (2次) 甕棺墓1基 土坑墓2基 木棺墓1基 溝状遺構1条 (6次)	甕棺・弥生土器				
要約	赤迫遺跡G区では、4基の墓が確認された。これらは尾根上の最も高い部分を選定して列状に並んでおり、一連の墓であると考えられる。これらの時期については、出土遺物などから5世紀後半~6世紀中頃までが想定されている。今回の調査で検出された石蓋土坑墓は筑後川中流域でも見られる墓制であり、地域による影響なのか在来の墓制なのか今後の検討が待たれる。 元宮遺跡では、甕棺墓を含む7基の墓が確認された。調査の結果、従来市内で確認されていた弥生後期後半代の甕棺墓を甕棺として古墳時代まで継続する墳墓の意味が、元宮遺跡でも行われていたと想定される。							

**赤迫遺跡G区
元宮遺跡1・2・6次**

2014年3月31日

編集	日田市教育庁文化財保護課
発行	〒877-0077 大分県日田市南友田町516-1 日田市教育委員会
印刷	〒877-0023 大分県日田市田島2-6-1 尾花印刷有限会社
	〒877-0026 大分県日田市田島本町8-8



日田市